
とある少年の絶対防御

爪竜連牙斬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年の絶対防御

【Nコード】

N74940

【作者名】

爪竜連牙斬

【あらすじ】

学園都市にやってきた少年、『白鞘 委温』。

彼が手に入れた能力は最強の防御能力。

彼はこの能力で何を守るのか？

面倒臭い事が嫌いなのに面倒事に巻き込まれる彼の生き様をご覧ください！

1話 絶対防衛始めます（前書き）

小説書き始めた爪竜連牙斬です。
よろしくお願い致します。
それでは本編をどうぞ。

1話 絶対防衛始めます

『学園都市』東京都の3分の1を占める巨大な都市である。内部は23の学区に分かれていて各々に様々な特徴がある。

人口は230万人弱でその8割は学生である。

また、科学技術もぶっ飛んでいて20年くらい進んでいると言われている。

しかし、最大の特徴は記憶術や暗記術という名目の超能力研究、即ち『脳の開発』をしている所である。

これはそんな学園都市にやってきた一人の少年の物語である。

「俺が学園都市に来てからもう一週間も経つんだが…」
いきなりツツコンでくれたのはこの物語の主人公「白鞆 委温」である。

彼は今から身体検査にいく所なのだが楽しそうとして裏路地を通ったらバツタリ不良に出会ってしまった。

「おい！有り金置いていったら見逃してやるぜ」

「身体検査に遅れちまうだろうが」

しょうがないので財布を取り出す。中のは200円しか入ってなかった。

「テメエ、200円ってふざけてんのか!？」

「うるせえな、無いものは仕方ないだろ」

「なめやがって！」

不良が殴りかかってきたが当たる前に顔面に蹴りを入れる。

丁度その時親玉っぽいのが出てきた。

「貴様…よくも子分をやってくれたな！」

「そっちがやってきたんだよ。兄貴分なら子分の教育くらいしとけ」
そう呟いた時、委温の横を何か熱いものが通り過ぎた。

親玉っぽいのを見ると掌から炎を出していた。

「我はLEVEL3の発火能力者、加門 正一だ。謝るなら今の内だが？」

「…お前に俺の嫌いなものを三つ教えてやる。一つ、ピーマン」

加門が炎を飛ばすが委温はそれを横に跳んで回避する。

「二つ、ゴーヤ」

加門がもう一度炎を飛ばすが今度は飛び越えるように回避する。

「三つ、パセリ」

そのまま勢いを利用して加門に飛び蹴りを放つ委温。

加門はそれをもろに喰らい2，3m吹っ飛ぶ。

「貴様…苦いものが嫌いなだけではないか…それに、今は関係ない…」

そこまで言うとか門は気絶してしまった。

「さて、行くか」

倒れている二人を無視して委温はさっさと裏路地を抜ける。

「遅いじゃん白韃！今まで何処ほつつき歩いてたじゃんよ？」

「げ、黄泉川！何でお前がいるんだよ？」

『黄泉川 愛穂』アシタスギル警備員の一人で委温も一週間で4回補導された。

「助っ人として登場したじゃんよ。それにしても会っていきなり『げっ』はひどいじゃんよ」

「4回も補導されたらな…」

「来て一週間で4回も補導される奴も珍しいじゃんよ」

そんな会話をしていると黄泉川の後ろからピンクの髪の小学生らしき少女が近づいてきた。

「黄泉川先生、もうすぐ始まるのですよ、ってそっちの子は？」

「黄泉川、お前の子供か？」

「違うじゃんよ、同僚じゃんよ」

「始めましてなのですよ、先生は月詠 小萌なのです。気軽に小萌先生って呼んで下さい。貴方は？」

とりあえず自己紹介されたので返しておくことにする。

「俺は白韃 委温です。山田先生」

「先生の名前は山田じゃなくて小萌なのですよ！？」

「こいつは会った人全てを山田だと思ってるじゃんよ」

そう、委温は人のことをとりあえず山田と呼ぶ癖がある。

「日本で一番有名な名前だ」

「日本で一番多いのは佐藤ですよ？」

「：俺が会った中で一番多かった」

今まで山田が一番多いと思ってたらしい。

「小萌せんせーい！」

またまた誰か現れた。今度は黒いツンツン頭だ。

「もう身体検査始まりますよ？」

「ええ！？もうそんな時間なのですか？」

「さっさと行くじゃんよ！三人共！」

もうすぐ身体検査が始まってしまうので4人は走って向かう。

「へえ、お前は白鞆 委温っていうのか。俺は上条 当麻。よろしくな」

「よろしくな、山田」

「今、上条って言ったじゃねえか！何で山田なんだよ！？」

「悪い癖だな、悪かった山田」

「直ってねえよ！ったく、それにしてもお前男みたいな喋り方だな」
その言葉に委温のこめかみがピクツと動いた。

「どういうことだ？山田 当麻」

「山田じゃねえって！だってお前女だろ？」

「OK、上条 当麻。君を愉快で素敵なスクラップに変えてやろうじゃないか」

「お前、男だったのか！？」

5分後

半殺しにされかかった当麻は土下座していた。

「申し訳ございませんでした」

「ふむ、よろしい。次、お前の番だぞ」

「おう、ちょっと行ってくる」

3分後

「だ、またLEVEL0だ。ま、しょうがねえけどな」

「開き直りか？感心しないな」

当麻は苦笑しながら返してきた。

「そうじゃなくて俺の右手にはどんな異能の力も打ち消す力が宿ってるからな」

「へえ、そいつは面白そうだな。つと、どうやら俺の番が来たらしいちよっと思ってくる」

委温は一歩踏み出す、期待と不安を胸に抱き。

「あ、面倒くさい」

前言撤回、この主人公は駄目駄目な奴です。

1話 絶対防衛始めます（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？

楽しんで頂けたなら光栄です。

楽しんで頂けなかったらもつと頑張ります。
それではまた次回。

主人公設定（前書き）

今回は主人公設定です。

我らが白鞆 委温のステータスを見よ！

主人公設定

名前…白鞠 委温（しらさや いおん）

身長…175cm

体重…57kg

性別…男

容姿…女性的な顔立ちをしていて黒い髪を伸ばしていて後ろで結んでいる為よく女性と間違えられる。

可愛い系では無く美人系。体型は痩せている。

性格…面倒な事が嫌い。困っている人がいたら文句を言いながらも助けてしまう。

女と間違えると半殺しにする。初対面の人とはとりあえず山田と呼ぶ癖がある。

いつもテンション低め。基本はツツコミに周る。

外では孤児だった為小学生一（低学年以下）には優しい。

好きなもの…スイーツ，辛いもの，お菓子

嫌いなもの…苦いもの，面倒な事

能力…次回明かされます。

俺の能力がこんなに強いわけがない

「君には常盤台中学に行ってもらおう」

「は？何で？」

「君の能力は強すぎてここでは測れない」

（面倒くさい…）

なんかかんやあって学舎の園の前まで来た。
ここは物凄いチェックの厳しい場所らしい。

「ここは物凄いチェックの厳しい場所じゃん。だから…」

黄泉川がバックの中を漁りだす。

物凄い嫌な予感がする。ていうかコイツといると面倒事しか起こらない。

「じゃーん！これ着るじゃんよ！」

黄泉川が取り出したのはセーラ服だった。

どうやらよほど殺して欲しいらしい。よし、半殺しにしよう。
戦闘開始！

1分後

「まだまだじゃんよ」

負けた。ボコボコにされた。体中が痛い。

最初に会った時から感じているがコイツの戦闘力は異常だと思う。

「まあさっきのは冗談じゃん。さっさと行くじゃんよ」

「最初からそう言え…」

冗談でキレてボコボコにされたコッチとしてはとても惨めだ。
しかし、これでようやく入れる。

「ここが常盤台中学か…でかいな」

差別だと思う。俺が通っている学校は小さいのにこれがLEVEL 3以上しか取らないという学校の實力か…

そんなことを考えているとツインテールの少女が近づいてきた。

「始めまして、ジャッジメント風紀委員の白井 黒子と申します。中を案内させていただきますわ」

礼儀正しいいい子だ。さすがはお嬢様学校といったところか。

白井に案内されて辿りついた場所は運動場だった。広い…

「貴方はとりあえずここで待っていて下さい」

しょうがないので黄泉川と世間話でもしながら待つことにする。

「しかし、お前のその喧嘩好きな性格はどうにかなんないじゃんよ？」

「喧嘩は嫌いだ。お前は俺が殴ってるところしか見てねえんだよ。自分からは仕掛けてない」

『ただ今より他校から来た白靴 委温の能力測定を開始します。運動場におられる方はご退場下さい』

ようやく始まる。長かったここまで来るのに長かった…

そういえば他校の生徒が珍しいのかギャラリーが集まっている。

黄泉川から励ましの言葉を受けて能力測定が開始される。

と、思ったらいきなりトラックが突っ込んできた。

多分最高速度300km/hくらい出てる。

びっくりした。だが、それ以上にびっくりしたのは

自分が左手だけでそのトラックを止めたことだ。

周りがざわつく中アナウンスが放送する。

『次に入ります。それでは少々お待ち下さい』

少々待てと言われたがすぐに係員らしき人がやってきた。
その人に渡されたのは野球のバットとボールだった。
なめてるのかこいつは…

「あの…もしかして野球は苦手ですか？」

「いや別に…」

真面目にそんな心配をしてきやがった。
しょうがないので次の指示を待つ。

『お待たせしました。次の測定に入ります。ではそのバットでボールを打って下さい』

実は本当におちよくっているのではないだろうか？
もう、考えるのも面倒くさいのでとりあえずやろう。
ノックの要領でボールを投げて打った。
そのボールは音速で飛んでいき体育館の屋根を吹き飛ばした。

「…これ、弁償するのは俺なのか？」

不味い、俺にそんな金はない。

『測定結果 減少威力：300km/hのトラック 増加威力：体育館破壊 総合評価LEVEL5』

歓喜の声が沸きあがった。正直うるさい。

係員らしき人が近づいてきて能力の説明をするので会議室に来て欲しいということだった。

（また面倒なことになりそうだ…）

「君の能力を説明します。君の能力は……」

何だか妙に焦らして来るのがうざい。さっさと言えよ。

「威力を操作する力です。物体、空気、電気、火、光などの威力を操れます」

「そんなことした覚えはないが」

「恐らくですがさきほどトラックを突っ込ませたときに無意識の内にはないかと」

こいつ殺す気だったのか…アブねえ野郎だ…

「この能力は拳銃で撃たれても核兵器の爆発に巻き込まれても傷一つ付きません」

「すごい便利な能力だな」

ラッキーだ。そんな素晴らしい能力が手に入るなんて。これで喧嘩仕掛けられても素通りできる。

「それではお疲れ様でした」

やっと解放された…帰りにパフェ食って帰ろう。

黄泉川は…先に帰ったらいいな。俺もさっさと帰るとするか。

「ちょっとアンタ! 待ちなさい!」

呼び止められて振り向くとそこには茶髪の少女が立っていた。

俺の能力がこんなに強いわけがない（後書き）

今回は一人称視点で書いたのですがいかかがでしたか？

三人称とどっちが読みやすいでしょうか？

今回、主人公の能力が明らかにになりました。

能力の説明は物語を進める内に明らかにしようかな〜と思っています。
それではまた次回。

電撃少女ビリビリみこと

「アンタ！私と勝負しなさい！」

いきなり勝負しろと来た。どうやらお嬢様学校にもいい子ばかりではないらしい。

何か前髪から火花を散らしている。怖えよ。

「いきなり勝負ってのはないだろ。まずは自己紹介すべきじゃねえのか？」

「む、確かにそうね…。私は御坂 美琴よ。アンタと同じLEVEL 5。これでいいわね？」

「分かった。それで、何で勝負なんかしたいんだ？山田」

あ、また言ってしまった。本当に悪い癖だ。

っていうか向こうも何か震えて火花散らしてるんだが…

「御坂って今言ったじゃない！」

バチバチッ！

そんな擬音と共に雷撃の槍が飛んできた。

特に防御をしたわけでもないのにこっちは傷一つない。

「なるほど…。どうやら本当みたいね。その絶対防御ってのは」

「絶対防御？何だそれ？」

「アンタの能力名でしょうが！」

どうやら俺の能力名は絶対防御パーフェクトガードと言われてるらしい。

「んで、さっきの質問に答えろよ。俺達には勝負する理由なんて無いだろ…」

もう面倒くさすぎて普段から低いテンションが更に低くなってしまっている。

不味いな。俺、テンション上げるのは苦手なんだよ。

「単純よ、私は自分より強い人間が存在するのが許せないの」

「許せ」

「アンタ、ツツコムならもっとテンション上げなさいよ！」

遂にテンションのダメだしをされた。

そんなこと言われても無理だ…

「じゃあせめて審判連れて来いよ。そしたらやってやらないことはない」

「審判連れてくればいいのね？分かったわ」

御坂が携帯電話を取り出し誰かに電話する。
すると何もなかった空間から白井が現れた。…手品か？

「その能力…空間移動テレポートか？」

「ええ、そうですね。LEVELは4ですわ。それで確か審判でしたわね」

おっと、そうだった。そういえば勝負するんだっけ？
よし、1秒で終わらせてやろう。

「準備はいいですわね？ それでは…開始！」

「降参します」

どうだ？ 宣言通り一秒で終わらせてやった。
何か御坂が震えているが気にしない、帰ろう。

「馬鹿にするなー！」

御坂が超電磁砲を放つが左手のみで受け止める。
御坂も白井も驚いた顔をしている。

「んで、もう終わりか？ なら帰るけど」

「まだまだ！ 負けないんだから！」

御坂の周りに砂鉄が集まっていく。
どうやら磁力も扱えるらしいな。
それを振動させて破壊力を生み出すってわけか。

「これならどうよ！」

「全然効かないけど…」

砂鉄で作られた剣は俺が触れると四散してしまった。
磁力っていう力を操作して拡散させただけだ。

しかし、いつの間にか接近していた御坂は俺の手を握り電流を発生させる。

が、やはり俺には傷一つ付かない。

「もう終わりでいいな？」

「アンタ：さっきから何で攻撃して来ないのよ？」

「能力手に入れる前の俺なら攻撃してただろうな。痛い嫌いだし。でも今はこっちは絶対に傷付かないから攻撃する必要が無いんだよ」

「そう：」

何だかしよげているいる。凄い悪い気がする。
しょうがない：。スイーツでも奢ってやるか。

「なあ御坂、話は変わるんだが良かったらこのスイーツを紹介してくれないか？」

「え？まあ、いいけど：」

「それじゃあ行こうぜ。白井も」

「え、あ、はい」

とりあえずパフェでも食わせりゃ機嫌も直るだろう。

「うん、うまい。店員さん、おかわりをくれ」

「アンタ：どんだけ食べるのよ？」

軽く御坂達が引いているが気にしない。
そんなことを気にしてはスイーツの王など目指せない。

「どうして貴方はそれほど食べているのに太らないんですの？是非とも教えて欲しいですわ」

「：大人の事情だ」

実は俺は主人公という設定があるので太りにくい。
だがそれはまだ子供には早いことだ：

「ところで白鞘さん、貴方『ジャッジメント風紀委員』に興味はありません？」

「無い」

「あっさりですわね…もう少し考えてくれても」

そんなこと言われても興味無いものはない。

それに面倒臭い。

「その代わりって訳じゃないが暇な時は協力してやってもいいけど」

「そんなこと言ってアンタ、また面倒くさいとか言って協力しないんですよ」

「……否定は出来ない」

弱いな俺。中学生、しかも会ったばかりにこんなこと言われるなんて…

「それでは携帯の番号を教えてくださいませんか？」

「別にいいけど…」

「あ、それじゃ私も交換しとくわ」

白井は分かるが何故御坂まで？

「交換してたらいつでも再戦できるでしょ？…っと、これでいいわね」

コイツ俺の心読みやがった。

いつの間にか俺の携帯を取っていた御坂が携帯を返してくる。

「あああああああああ！！！！！！！！！」

突然、白井が絶叫した。俺達は驚いてそちらを見る。

白井はわなわな震えながら恐る恐る声を出す。

「今日は初春との約束があるのを忘れておりましたわ！」

「初春？ああ、アンタがこの前会って欲しいっていった」

「お姉様がいつもファンの方の行為に迷惑しているのは重々承知しております。」

ですが初春は分別のある大人しい子。それに私が認めた数少ない友人、ここは黒子に免じてどうか」

「はあ、まあいいけど」

どうやら先約があったらしい。

悪いことをしてしまったようだ。

「悪いことしたみたいだな。こっちの用事も済んだしそっちに行ってもいいけど」

「そうさせて頂きますわ。いえ、どうせなら白鞠さんにも一緒に来て頂いて貰いたいのですが」

「……………何で？」

思わず間をかなり空けてしまった。
だが、理由が全く分からない。

「白鞘さんもれっきとしたLEVEL5。それに今後、風紀委員としての活動に協力して頂くかもしれません し…。会っておいて損は無いと思いますの」

「ねえ黒子、何で私が協力するって言った時は断るくせにコイツの時は頼むのよ？」

「お姉様は直ぐに問題を起こすからですわ」

白井が呆れたように言う。

確かに御坂ならやりそうな気がする。

「残念だが俺にはこれから昼寝という尊い時間を満喫する」

「ふむ…今、初春との約束に遅れそうなのは白鞘さんのせい、これは初春に状況を説明する必要があるん じゃないんですの？ご自身の手で」

「無い」

「ありますわ！もし、一緒に来て頂けないというのでしたら…」

白井の背後に黒い何かが溜まっていく。

嫌な予感がする。逃げようか？

「白鞘 委温は中学生二人と遊ぶ遊び人でロリコンという噂を流しますわよ」

「……最低だな、お前」

本当に最低だ。そして自分がロリ体型であると認めるのだろうか？

「分かったよ、一緒に行けばいいんだな？」

「ええ、それでは参りましょうか」

本当に今日は面倒事ばかりだ。

電撃少女ビリビリみこと（後書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした：

ま、こんな駄作を待ってくれてる人はいないでしょうが、
それではまた次回お会いしましょう。

強盗は突然になの！

「は、始めまして！初春^{ういはる} 飾利^{かざり}です！」

「どうも、始めまして。初春のクラスメートの佐天^{さてん} 涙子^{なみこ}です。ついでにLEVELは0です」

緊張しているらしいのが初春で何かやけくそっぽくなっているのが佐天らしい。

とりあえずこちらも自己紹介をしよう。

「私は御坂 美琴、よろしくね。初春さんに佐天さん」

御坂に先を越された。

出ばなをくじかれてテンションが下がった：

「白鞘 委温、よろしく：」

「白鞘さんって、あの新しくLEVEL5になったんですよね！？」

初春が目を輝かせて聞いてきた。

ここは情報が伝わるのが速すぎやしないだろうか？

一方、佐天の方はあまり面白くなさそうにしている。

「そうだけど：」

「さ、佐天さん！本物ですよ！」

本物って…偽者もいんのかよ…

「こんな所で立ってるのも何だしゲーセン行こっか？」

「「え？」」

御坂の突然の提案に二人とも驚いた顔をする。

というかゲーセンって：もう少し女の子らしい趣味を持てよ。

「何かイメージと違いましたね」

「そうだね、全然お嬢様って感じじゃないし」

「上から目線でもありませんでしたね」

初春と佐天からそんな会話が聞こえてくる。

自慢じゃないが耳はかなりいい方だ。

「どうぞ」

女性が佐天にチラシを渡してくる。

俺はそれを後ろから覗き込む。

どうやらスイーツのチラシらしい。

「あ、見ますか？」

「ああ、ありがとう」

佐天がチラシを渡してくる。

いい子だな、この子達。

チラシを見ると案の定スイーツのチラシだった。

とても行きたい。

「あ、すみません……御坂さん？」

佐天が御坂にぶつかり謝るが御坂は気づかずチラシを見つめている。
その視線の先には安っぽいカエルのキャラクターがあった。

「あの……もしかしてコレ欲しいんですか？」

「え！？ いや、違うわよ！ だってカエルよ！？ 両生類よ！？
何処の世界にカエルが好きな女の子がいるのよ！？」

その時、御坂のカバンに付いていたストラップが揺れた。
ストラップは……可愛らしい両生類のカエルだった。

「「あ…」」

「人が多いですね…何かあるんでしょうか？」

「そうですわね…私、ベンチを確保してきますわ」

「あ、私も行きます！佐天さん、私の分もよろしくお願いします。
お金は後で〜！」

初春が離脱しました。

白井が離脱しました。

そんなメッセジ―が頭の中に浮かんだ。

「え、ちょっと初春！」

佐天が初春を呼び止めようとしたが御坂を見て身を引いた。

御坂は何だか妙にそわそわしていた。

「え？何？どうかした？」

「いえ…あの、順番変わりましたようか？」

「え？いや、いいわよ！私はクレープさえ買えばいいんだから」

御坂は一瞬嬉しそうな顔をしたが直ぐに冷静を装った。

案外、可愛い奴だ。

順番は進み佐天の順番が来た。

「おめでとうございます。コレ、最後の一個なんですよ」

「え？最後？」

突然、御坂が地に伏した。

世界の全てに絶望しているように見える。

「あのー、コレあげましょうか？」

「いいの！？ありがとう！！」

御坂が佐天の手を取り何度も振る。

そしてカエルストラップを受け取るとスキップでベンチに向かっていた。

「何かイメージと違いましたね」

「そうだね、全然お嬢様って感じじゃないし」

「上から目線ってわけでもありませんし」

初春と佐天からそんな会話が聞こえてくる。

「そういえばあの銀行…どうして昼間から閉めているんでしょう？」

「確かに…強盗とかな」

「そんなわけないじゃないですか」

佐天が笑いながら返してくる。

まあ確かに強盗はないだろう…。

嫌な予感がする…。

ドカン！

突然、銀行のシャッターが吹っ飛んだ。

中から三人組が出てきて走って逃げようとする。

「初春！あなたは警備員アンチスキルに連絡を！」

「はい！」

白井が急いでクレープを食べ強盗の方へ走っていく。

「黒子！」

「お姉様は待っててください！白鞘さんにも見せて上げますわ、風ジ紀委員ヤッジメントの仕事を」

「風紀委員ジャッジメントですの」

白井が腕章を強盗に見せる。

強盗達は互いに顔を見合わせると笑い始めた。

「おいおい、ジャッジメント風紀委員も人手不足かよ。

おい、お嬢ちゃん！とつと何処か行かねえと怪我しちゃうぜ！」

「そういう三下の台詞は死亡フラグですわよ」

不良が白井に殴りかかる。

が、白井はそれをあっさり回避して相手を倒す。
ジャッジメントさすがは風紀委員ですの。

「危険です！広場で待っていて下さい！」

「でも！」

初春とバスガイドらしき女性が何か言い合っている。
二人とも凄い剣幕だ。

「どうしたの！？」

「男の子が一人居ないんです！」

大変なことになった。

どうやらツアーに参加していた男の子が一人足りないらしい。

「探すわよ！」

「私も行きます！」

「え？でも…」

「行かせて下さい！」

「分かったわ」

こうして男の子の搜索が開始された。

「今更後悔しても遅えぞ」

強盗の掌に炎が生まれる。

（発火能力者…パイロキネシスト…ったく）

考えた後道路の方に走り出す。

「な、逃がすかよ！」

強盗は一瞬怯むがすぐに白井に向かって炎を放つ。
炎は白井を追うように飛んでいく。

「誰が、逃げますの？」

炎に当たる直前、白井は空間移動テレポートを実行し強盗の後頭部に蹴りを入れる。

そして倒れた強盗に太腿に仕込んでいた金属矢を空間移動させ強盗の服を地面に縫い付ける。

「これ以上抵抗するようなら、次はコレを体内に直接空間移動させますわよ」

「こっちはいないな」

「こっちもいないわ」

小さい男の子は未だに見つからない。
何処にいったんだ…

「駄目えええええ!!!」

突然響き渡った佐天の声。
視界に入っただのは強盗の一人が佐天を蹴り飛ばした所だった。

強盗はそのまま車に乗る。

「黒子！」

「え？」

「ここからは私の個人的な喧嘩だから悪いけど手、出させてもらわよ」

御坂が電気を体に纏いながら歩いてくる。

「お、思い出した。風紀委員ジャッジメントには捕まったが最期、身も心も踏みにじって再起不能にする最悪の空間移動者テレポーターがいて」

「誰のことですか？それ」

「更にはその空間移動者の身も心も虜にする最強の発電能力者エレクトロマスターがいて」

白井はその言葉を聞いて小さく笑う。

「そう、あの方こそが学園都市230万人の頂点、7人のLEVE L5の第三位」

御坂がポケットからコインを取り出し指で弾く。

突っ込んでくる車に対してもう一度コインを弾いた。

するとコインは音速を超えるスピードで飛んでいき車を吹っ飛ばした。

「『超電磁砲』、御坂 美琴お姉様。

常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫ですの」

「…すげー」

「貴方の能力も中々のものでしたわよ」

連行されていくパイロキネシスト発火能力者に向かって白井が呟く。

発火能力者は白井の方を見る。

「LEVEL3といったところでしょいか。能力に有頂天になる余り道を違えてしまったようですね。

しばらく自分を見つめ直して下さいな」

そう言って白井は発火能力者のところから去っていく。

発火能力者は小さく唇を噛んだ。

「本当にありがとうございました！」

「い、いえ、そんな…」

佐天が助けた子供の母親が佐天に頭を下げている。
一方、佐天は困惑している様子だ。

「本当に何とお礼を言っているか。ほら、あなたも」

「お姉ちゃん、ありがとう！」

子供が笑顔で佐天に礼を言って佐天が頬を染める。

「はあ…」

「お手柄だったね佐天さん、すごくかっこよかったよ」

「え？」

御坂に褒められた佐天が恥ずかしそうに俯く。

「御坂さんも……」

「お姉様！」

佐天が何か言う前に白井がそれを遮って御坂に飛びつく。
抱きつかれた御坂は引き剥がそうとする。

「御坂さんも、すごくかっこよかったです」

佐天がそう言って笑った。

「そういえばアンタ！途中からナレーションしかしてないじゃない

！」

……本当にごめんなさい。

強盗は突然になの！（後書き）

またまた更新が遅れてすいませんでした。

今回は超電磁砲の1話ですが台詞が若干というかなんかなり違います、
ごめんなさい。

今回全然活躍してない主人公。

しかし！次回こそは！

それではまた次回。

モアイじゃない、最愛だ！

突然だが皆に質問だ。

目の前には巨乳でジャージ姿の警備員アンチスキルがいる。

そして俺は椅子に座らされている。

さて皆ならどうする？

…さあ、送られてきた葉書を見てみましょう、送られてないけど。
まずは一枚目。

『襲う』

誰だ？こんな馬鹿みたいな葉書送って来たのは。

冗談もほどほどにしてくれよ。俺は熟女好きじゃねえ。

「誰が熟女じゃんよ？」

コイツ…俺の心の中を読みやがった。

まさかこいつも能力者だったとはな…。

さて、気を取り直して二枚目に行こうか。

『逃げる』

それが出来れば苦労はしねえよ。

いや、待てよ。ここは俺の頭脳と皆の考えで逃げ道を探してみるか。

「さっきからちゃんと聞いている？だから私は君の為を思って話をしてるじゃんよ」

何か言ってるが気にしない。
さてそれじゃ考えるか…

案1…大人しく話を聞く

いきなり諦めてるじゃねえか…
誰だこんなふざけた案を提出した奴は。
しかし、どうしたものか…

案2…強行突破

それで逃げてもコイツは地獄の果てまで追いかけて来そうだな。
しょうがない…大人しく話を聞こう。

「それで何で喧嘩したじゃんよ？」

「いや、だから俺は人助けをしようとして…」

ていうか聞くの遅くないか？
普通聞いてから説教するものだろ。

「はあ…それじゃ今度からもう絶対に喧嘩しないこと！分かった？」

はいはい…やっと解放されるぜ。

「やっと帰れるか…」

こっちは人助けをしただけなのに怒られすぎだろう。

「おい、白鞘？」

「お前、確か上条だったか？」

聞き覚えのあった声がすると思えば相手は上条だった。

「休みなのに制服ってことは補習か？」

「ああ、お前も補習か？」

「いや、アンチスキル警備員に補導されてた」

「ふーん、あれ？じゃあ、何で制服なんだ？」

「単に制服意外の服がないだけだ」

とても驚いた顔をしている。何故だ？

「上条さんは制服意外の服を持っていない人を初めて見ました」

「ファッションとか分からないからな」

「それならファッション雑誌読めばいいだろ？」

上条が呆れたようにため息をつく。

そんなことを言われても分からないものはしょうがない。

「超見つけました」

俺のでも上条のでもない声が聞こえた。

辺りを見回すと茶髪の小柄な女の子がいた。

「あなたが先ほど超助けてくれた人ですね？」

まあ、助けてもらわなくても自分で超なんとかできましたけど」

「そうか……で、お前誰だ？」

「お前が助けたんじゃないかねえか！？覚えとけよ！」

「まあ自己紹介もしていませんし覚えていなくても超しょうがないでしょう」

ていうかコイツさっきから超が多くないか？

「私の名前は絹旗 最愛です。モアイって言ったら超ぶっ飛ばします」

「あっそ。それで、山田はどうして俺を追ってきたんだ？」

「：お前のそれはもはや病気じゃねえか？」

上条はそう言うが少女は全く動じていない。

自分で言うのも可笑しいが名前を間違えられても動じないのはすげえな。

「先ほどのお礼に超面白そうな映画に誘ってあげようと思ったんです」

絹旗が映画のチケットを渡してくる。

全く知らない映画だった。

「なあ、これ知ってるか？」

「いや、知らねえ」

「あなたが知らないのも無理はないでしょう。

何せこれは超C級映画ですから！」

「おい、誰かコイツに常識というものを叩き込んでやれ」

コイツ、助けて貰ったお礼にC級映画を勧めてきやがった…。

普通CMとかでも宣伝してる映画にするだろ。

「ふう、超分かってませんね」

「いや、全然分かりたくない」

「いいですか？超A級とか超B級とかは映画じゃないんです。

映画とは超C級を指すんです」

「それただ単にお前がC級映画が好きなだけじゃね？」

上条の鋭いツツコミが入った。ナイスだ。

「……超なかなかいツツコミしますね」

「お前もう訳分らないぞ？」

「それでは超行きましょう。む、そういえば超なかなかいツツコミをする少年の分のチケットがありませんね……」

「俺はいいよ、今から夕飯の支度もしなきゃいけないし」

まさか……今から俺一人でコイツと戦うのか？

俺のツツコミはこいつに勝てるのか？

「そうですか、それでは行きましょう」

超嫌です。超離して。超誰か助けて……。

ヤバイ…………とてもつまらない。

だが絹旗にとっては面白いのだろう。

さっきから画面を真剣に見つめている。

ここでつまらないと言ったら誘ってくれた絹旗に失礼だろう。

「……………ふむ、超つまらないですね」

「おい、誰かコイツに常識というものを叩き込んでやれ」

コイツ…ついさっき俺がつまらないというのは止めようと思ったのに。

ていうかコイツ自分から誘ったよな？

「それは先ほども言いました。同じ言葉を使うのはツツコミとして超どうかと思います」

「お前にツツコミについてどうこう言われる筋合いはねえよ」

コイツといると凄く疲れる…。

「お前超面白そうとか言ってたよな？」

「おかしいですね、確かにパンフ見たときは超面白そうだと思った

のに」

おかしいのはお前の頭だ。

コイツ、俺のこと舐めてないか？

「ま、このヒロインは後10分くらいで超バッテリーですね」

「だったら俺は死なない方に賭けるね」

「じゃあ死んだら超夕飯奢ってください」

ザクッ！

突然ヒロインがナイフで刺された。

今、賭けたばかりだぞ俺。

「超夕飯奢って下さいね」

超むかつく…。

「やっと終わった…」

地獄のような時間だった…。

この上俺はコイツに夕飯まで奢らなければいけないのか…。

「さあ、超夕飯奢って下さいよ」

「分かってるよ、ほら行くぞ」

「何処へ？」

「スーパーだよ、スーパー」

とても不思議そうにしている絹旗。
何がおかしい？

「ファミレスじゃないんですか？」

「俺が作るんだよ」

「…………私を部屋に連れ込んで超何をするつもりですか？」

「おい、俺をロリコンと連想させるようなことを言うな」

これから人が飯を奢ってくれようというのになんてガキだ。

「お前何か好きな物はあるか？」

「むう、それじゃあラーメンを超期待します」

「ラーメンか…よし、じゃあ行くか」

俺達はスーパーへと歩き出した。

究極のラーメンを作るために……………。

ま、嘘だけど。

モアイじゃない、最愛だ！（後書き）

遅れて超申し訳ありません！

超反省してます……

今回は主人公のツッコミが炸裂です。

ツッコンでるけど『！』が付きません。

基本テンションが低いですから。

次回こそは主人公が戦闘能力で活躍！……………するといいな。

この主人公を戦闘で活躍させるのは無理な気がしてきました。

あと、サブタイトルのネタが尽きてきました。

次回から普通になるかも…

それではまた次回！

不思議のコンビニのアイス

「超何ですか？コレ」

「見ての通りラーメンだ」

「スープが超チョコで出来ているように見えるんですが」

先ほどから文句ばかり言う絹旗。

一体俺の『チョコ☆ラーメン』の何処に不満があるのだろうか？

「超普通のラーメン作って下さい」

「見ての通り普通のラーメンだが？」

「超ふざけんな！？コレの何処が普通なんですか！？」

そう言いながらソファを投げってくる絹旗。

部屋を荒らすのは辞めて欲しい。

「ここで白鞘さんの部屋を超説明しましょう」

「誰にだよ」

絹旗が部屋の説明をしている間に味噌ラーメンでも作っておこう。

「まずリビング！テレビが超大きいですね。ソファが二つにテーブル一個。」

超シンプルとしかいいようがありません」

リビングの説明を終えた絹旗がキッチンへ入ってくる。

「さあ、こちらキッチン。超普通です、普通という言葉以外で表せません」

「うるせえな、ほっとけよ」

「今は味噌ラーメンを超作ってます」

キッチンの説明を終えた絹旗は風呂場へと向かう。

余りうるちよろされると嫌な感じがする。

「お風呂も超なかなか広いですね、流石はLEVEL5です」

別にここにはLEVEL5になる前から住んでいるが。

今度は風呂場から俺の部屋へ移動したらしい。

「男の子の部屋に来てやることといえば、ズバリ！超ベッドの下を漁る！」

絹旗ならやと思った。

まあ、別にベッドの下に少女に見せられないものがあるわけでもないが。

「むう、超おかしいですね。は！もしかして超本棚の裏に？」

何か頑張っていると申し訳ないがラーメンが出来たので呼びに行こう。

「……………」

「おい絹旗、ラーメン出来たぞ」

扉を開けて部屋に入ると絹旗が泣いている。
何があった……？

「超エロ本が見つかりません」

「俺の心配を返せこの野郎」

コイツ……そんなくだらないことで泣いてたのか……。

「ちなみに超嘘泣きです☆」

「お前とことん嫌な奴だな」

本当に一度ぶっ飛ばしてやろうか？
だがここで殴ったら後で幼女虐待とか言われそうだな。

「ところでこの白鞆さんと写っている女性は誰でしょうか？」

絹旗が写真を指差しながら言う。

「……………幼馴染み？」

「何で超疑問系なんですか!？」

「嘘だ、『外』に居た頃の友達というか家族みたいな奴だよ」

「要するに幼馴染みで超あってるんですね？」

まあ、そういうことだ。

「超つまんね」

「何が？」

びっくりだ。幼馴染みを紹介したらつまらないって言われたの。

「まあいいでしょう。それで、ラーメンは？」

「もうできたよ」

「何だ、普通に作れば超美味しいじゃないですか」

さっきも十分普通に作ったんだが……。

しかし、まあ絹旗も満腹で満足してるみたいだしよしとするか。

「それじゃ、私は超帰ります。あ、超アドレスを交換しておきましょう」

絶対嫌だ。コイツといると疲れがいつもの二倍の速さで溜まる。
だが遅かった。いつの間にか俺のケータイを取ってアドレス交換済
ませてやがる。

「それでは」

「じゃあな」

できればもう会いたくないけどな。

やっと絹旗が帰った……。

ヤバイ、超嬉しいんだけど。

「コンビニでも行くか」

現在時刻6時、コンビニでアイスでも買って公園でゆっくりしとう。

そうと決まれば早速行こう。

コンビニに着いたんだが……。

何かさっきから缶コーヒーを大量に買い物カゴに入れてる奴がいるんだけど。

いや、あれ全部飲むのかよ……………。

まあいいか。好みは人それぞれだ。

「さてと、イチゴとバニラとチョコと砂糖とおでんのアイスでも買うか」

俺も最初は驚いたがここには砂糖とおでんのアイスが売っている。これがとても美味しいのだ。しかし、学校の皆には不評である。何故かは分からないが。

「2000円になります」

ちょうど二千円札があった。

二千円札は自販機で使えないからさっさと使おう。

「ありがとうございましたー」

さてそれじゃゆっくりアイスを食べよう。

「不幸だーーーー！！！！！！！！！！」

そんな変態じみた叫び声が聞こえてきた。
だがよくよく聞くとその声は上条の声だった。
何人かの不良と追いかけてっこしている。

「助けてやるか……」

そこで俺はある事実に気づいた。
ここで上条を助けているとアイスが溶けてしまうのではないか？
どうする……………？
考え抜いた結果俺が出した結論はこうだ。

『上条くアイス』

ごめん上条、お前はアイスに負けたらしい。
アイス食べ終わってもまだやってたら助けてやろう。

「おい！その貴様！」

何か呼ばれた。俺また何かやったか？
振り向くとそこには見たことある気がする奴がいた。

「……誰だっけ？」

「加門だ！加門！ほら！一話に出てきた！」

読者の皆は覚えているだろうか？
俺はてっきりあの話で出番終わりだと思ってたのに。

「それで山田は何の用だ？」

「今加門と言っただろう！」

「ごちゃごちゃうるせえ、こっちは一話で能力使わずに倒した奴のこ
となんか覚えてないんだよ。」

「何だと!？」

「心を読んだ？こいつ読心能力者か？」

「違う、俺は発火能力者だ」

「いや、また読んだし全然説得力無い。」

「コレならどうだ！」

「加門が俺に炎を飛ばす。」

「もちろん能力で防御させて貰った。」

「だが、俺の手にあったアイスが袋ごと溶けていた。」

「……………殺す。」

「その後、彼の姿を見たものはいなかった……………」

不思議のコンビニのアイス（後書き）

また戦闘できなかった……。

まあいいや。

今回初登場の幼馴染み！ 今後物語に大きな影響を与えることに！？
そして、今回再登場した加門君！ 今後彼も物語に大きく関わること
になります！

……………ごめんなさい、嘘です。

次回はあの白いロリコンのモヤシと戦います。
それでは次回もお楽しみに！

しらさやくんと三人のLEVEL5たち

「と言うわけで貴女には今から学園都市第一位『アクセラレータ一方通行』と戦って貰うわ」

どういうわけだ？

そして貴女じゃなくて貴方だ。

ただ今の状況を説明すると俺はとある研究所に呼ばれた。

そこで待っていたのは凶悪な悪の結社、ではなく数名の研究者。

そして、俺は学園都市最強を決めるために一方通行と戦うことになった………。

普通に考えて一方通行の方が強いだろ。

よく考えろよ。

「準備が出来たら声をかけて頂戴」

何だそのラスボス戦前の最終準備の台詞。

ていうか準備って何するんだよ？

まあいい、さっさと声をかけるか。

と思ったら突然看板を出してきた。

看板にはこう書いてある。

『もちろんOKだ。』

もう少し待ってくれ。』

どこまでゲームっぽくすれば気が済むんだよ。

とりあえず『もちろんOKだ』を選んだ。

「そう、それじゃ行きましょう」

嫌だな、帰りたい。

なんてことだ……………。

まさか昨日のコーヒー男が第一位だったとは。

「オイオイ、折角の休日こんな所に呼ばれて何するのかと思えば
よオ、こんな男か女か分かんねエ奴と戦えってか」

お前に言われたくないこの白モヤシ。

「つーかよオ、お前よく見たら昨日の甘党じゃねエか」

お前はよく見なくても昨日のコーヒーだけどな。

そんなことを考えていると戦闘開始の合図がなった。

「一応自己紹介しといてやるよ、学園都市第一位『一方通行』だ」

「『絶対防御』、白鞘 委温だ」

自己紹介が終わると同時に一方通行が地面を蹴る。

砕けた地面の破片が飛んでくる。

しかし、俺はそれを手で掴み取る。

そして今度はこちらが破片を投げる。

「全然効かねエなア、オイ」

破片が一方通行に当たる。

すると破片はこちらに向かって方向転換をして飛んできた。

「俺の能力はあらゆるモノのベクトルを触れただけで操れる能力だ」

何それ？聞いてないよ。

お前、勝てるわけないじゃん。

「それじゃ、次行くぜエ」

一方通行が弾丸のような速さで飛んでくる。

避けるか、防ぐかどちらを選ぶか。

考える暇もなく一方通行が殴りかかってくる。

とりあえず防ぐことにした。

「ハッ、その程度で防げると思ってたのか！」

向こうの予想に反してこちらはちゃんと防いだ。

「防いだことは褒めてやるけどよオ、いつまでも触れてていいのか？」

ベクトルを操る能力ということは……………。
まさか、もしかして……………。

「俺の能力はお前の血液のベクトルも操作出来るンだぜ」

やっぱりか、とりあえず急いで離れよう。

脚力の威力を操作して10mほど距離を取る。

「逃がしてやるかってンだよ！」

一方通行が腕を振ると烈風が襲ってくる。

しかし、風の威力を能力を使って抑える。

ったく、あらゆるモノのベクトルを操る能力か。

面倒くせえな……………、風？

風っていうのは空気だよな……………。

俺が今風の威力を抑えているのは完全に威力を無くすと息が出来ないから。

ということは向こうも最低限の空気は取り入れてる筈。
だったら……………。

「さてと、次の攻撃はどうしようか迷っちゃまうなア」

「今度はこっちから反撃させて貰おうか」

今日はとても疲れる一日になりそうだな。
それじゃ、演算開始としますか。

「オイオイ、反撃開始すンだろ？ だったらボーっとしてンじゃねエぞ」

一方通行が大きく息を吸う。

すると一方通行がアッパーを喰らったように吹っ飛ぶ。

一方通行は最初不可解な顔をしていたが直ぐに気づいたようだ。

「デメエ、酸素に威力を付けやがったな！」

「大正解だ、一瞬で分かるとは流石第一位」

とはいえそろそろ演算処理が追いつかなくなってきた。

いや、結構疲れるなコレ。

持ってあと50秒ってところか？

「ハッ、まあソイツもそんなに長く持つわけじゃねエだろ。
人間一分くらいなら息は止めれるだろオが」

あ、バレた。

50秒間にどうにかアイツに息を吸わせなければ。
と考えているとそこで戦闘終了の合図になった。

「あん？ もう終わりかよ。微妙だなア、オイ」

「コッチは助かったけどな」

本当に面倒くさかった……。

ま、この様子じゃ一位は向こうで決まりだな。

「結果は一方通行が一位、絶対防御は二位よ」

ほらな、まあ別に二位で全然OKだが。
一位になると色々面倒くさそうだし。

「中々楽しかったぜエ、白鞘クウン」

「そうかよ、楽しんで貰えたなら何よりだ」

こっちは全然楽しくなかったよ馬鹿ヤロー。
そんな俺の心の内など知らず去っていく一方通行。
まったく、本当に変な奴だった。

俺もさっさと帰るか。

この研究所、無駄に広いんだけど。
出口が遠いな、空間移動テレポート使いたい。

「よお、お前が絶対防御か？」

振り向くと茶髪のカラの悪そうな男が立っていた。
ヤクザ予備生＋新人ホストみたいな感じだ。

「そうだけど、何か？」

「いや、それが分かれば十分だ。俺は『ダークマター未元物質』の垣根 帝督だ。
よろしく」

挨拶と同時に垣根の背中から白い翼が広がり、こちらに飛んでくる。後ろに跳んで翼を避けたが翼は地面を抉っていた。

「随分なご挨拶だな」

「どうせ能力で防げるから問題ねえだろ？」

そういう問題じゃねえだろ。

すると垣根が不敵に笑う。

「だが、コイツは防げるかな？」

広がった翼から突然光線が放たれる。

とりあえず防御するか……………。

そこで不可解なことが起きた。

俺は確かに防御したはずだ。

だが光線が俺の防御を『貫通』した。

俺の能力はどんな攻撃だろうとダメージを0に出来るはずだ。

それなのに……………。

ていうかそもそもあの翼は何だ？

どんな物質で構成されている？

そんな疑問に垣根が答えてくれた。

「どうなってるのか分かってねえみたいだな？ま、しょうがねえか。俺の能力は『未元物質』。この世に存在しない素粒子を作り出す能力だ。」

『まだ見つかってない』『理論上では存在するはず』とかじゃねえ。本当に存在しないんだよ。そして、この物質はこの世界の物理法則には従わないし相互作用した物質も独自の物理法則に従って動き出す」

「なるほどさっきの光線はその翼を通った光を違うものにしたってことか」

要するにコイツはこの世界とは違う世界の住人なんだな（色んな意味で）。

背中から訳の分かんない翼生えてるし。

「俺に常識は通用しねえ。それだけ覚えとけよ」

そう言って去っていく『未元物質』垣根 帝督。
本当に変な奴ばかりだな『超能力者』。

やっと研究所から出れた。

ったくさつさと何処かで糖分取らないとな。

「おーい！白鞘さーん！」

振り向いたら新しいLEVEL5に攻撃されるなんてことはないよな？

よし、振り向くぞ。

「何だ、佐天か」

「何だってひどくないですか!？」

声の主は佐天だった。

よかった、超安心した。

ところで何でコイツは帽子被ってるんだ？

「あら？白鞘さんではありませんか。こんなところで何を？」

「いろいろと面倒なことをやってた。

今日はぐっすりと眠れる気がする」

「白鞘さんって何かあるごとにそう言っただけですか？」

そんなことはない………多分。

そういえばこいつらは何をしていたんだろう？

「お前らこそ何してたんだ？」

「事件を解決してたのよ、四人で」

……………御坂か。本日三人目のLEVEL5だ。
もう戦闘になったりしないよな？

「ちょっと、人の顔見ていきなりため息つくんじゃないわよ」

「安心しろ、別に御坂の顔が癒し系じゃないからため息をついた訳じゃないから」

「うるさいわよ！アンタもしかして喧嘩売ってる！？」

いえいえそんな滅相もございません。

お嬢様に喧嘩を売るなど。

「そういえばアンタ、今日序列決めてたらしいじゃない？どうだったのよ？」

ニヤ〜っと笑う御坂、とても嫌な気がする。

「結果はまあまあだったよ」

「ふ〜ん、で何位だったのよ？」

「……………第二位」

「ふ〜ん、へえ〜、そう、じゃあ勝負よ！」

……………不幸だ。

しらすやくんと三人のLEVEL5たち（後書き）

やっと主人公が戦闘してくれた。

次回から超電磁砲ストーリーを進めると思います。

それでは次回もお楽しみに。

お財布の鳴くところに

「これは先輩の友達の彼氏が実際に遭遇したって話です。ある蒸し暑い夏の夜、その彼氏さんが人気のない公園を通りかかった時、一人佇んでいた女の人に駅までの道を聞かれたんです」

佐天が皆を見回してから話を再開する。

「その彼氏さんが快く道順を説明していると、何処か虚ろなその女の人がふわ〜っと手を上げて……
突然ガバーっと！」

「ガバーっと？」

御坂が唾を飲み込む。

いよいよクライマックスだ。

「ブラウスを脱いだんです」

……………は？

「つて、全然全く怖くないじゃん！」

バツと御坂が立ち上がる。

すると皆が被っていた黒い布が佐天と初春を包み込んだ。
ここでOP入りま〜す。

「入らないわよ！」

心の中を読まれただと？

俺ってそんなに顔に出やすいか？

「折角雰囲気を作ってもそんな話ではね〜」

ご尤もである。もう少しマシな話は無かったのだろうか？

「え〜、実際遭遇したら怖くないですか？

いきなり脱ぎだす『脱ぎ女』！」

「怖くない！っていうか、それってただの変質者じゃない？」

その通り、見つけたら通報しよう。

「じゃあじゃあ、こんなのですか？風力発電のプロペラが逆回転する時、街に異変が！」

「4時44分に学区を跨いではいけない。幻の虚数学区に迷い込む！」

「他にも使っただけでレベルが上がる、『幻想御手』^{レベルアップ}！」

よくこんな馬鹿なモノ考えるな、感心する。

御坂も白井も反応はほとんど俺と同じである。

「そんなくだらないサイトを見るのはお止しなさいな」

「え〜、でもこういうのって実際にあった話が形を変えて都市伝説になったってこともあるんですよ」

しかし、こんなビックリ箱を大きくしたような学園都市でも都市伝説ってあるんだな。

「これとか学園都市ならでは！って感じしません？」

「何々？どんな能力も効かない能力を持つ男？」

ふうん、確か上条がそんなことを言ってた気がするが実際に見た訳ではないしな。

「そんな無茶苦茶な能力あるわけありませんの。ねえお姉様？」

白井が呼びかけるが御坂から反応はない。

「え！？そ、そうね！そんな奴がいるなら一回戦ってみたいわね！」

御坂が不自然に笑う。

ていうか、お前いつも戦うこと考えてないか？

ここはとあるコンビニ。

アイスを買いに来たのだが偶然にも御坂を見つけた。
雑誌を立ち読みしている。お嬢様が立ち読みって……。

「おゝい、御坂」

声をかけてみるが返事はない。

無視は酷くないですか御坂さん？

「おゝい」

……………これは虐めか？

何で俺は中学生に無視されるという虐めを受けているんだ？

「ん？ ああ、アンタか。ゴメンゴメンちょっと考え事してたわ」

「そうか、俺はてっきり虐めてるのかと思ったぞ」

「そんなことしないわよ……。アンタ、私を何だと思ってるわけ？」
強い人を見つけると戦いを挑む電撃姫。
と言えるわけもなくとりあえず笑って誤魔化する。

「ところでそれ、都市伝説の本だよな？」

「え？そ、そうだけど……。何よ？」

別に御坂もやっぱり都市伝説に興味があるんだなと思っただけである。

「しかし、本当に脱ぎ女とかいると思う？」

「そういう露出狂の変質者はいるかもしれんが都市伝説自体は嘘だろうな」

「ふーん、やっぱり」

コンビニを出てしばらく二人で歩いているとツンツン頭の少年を見つけた。

間違いなく上条である。分かりやすいな、アイツ。
隣を見ると御坂がプルプル震えていた。

「見つけたわよ！今日こそ決着着けてやるんだから！」

「ん？おお、ビリビリ」

どうやら御坂も上条と知り合いらしいな。

そして上条も決闘を申し込まれてるらしいな。
南無阿弥陀仏。

「何で白鞘は俺に向かって念仏唱えてるんだよ？」

「そんなことはどうでもいいのよ！勝負よ！勝負！」

「ビリビリ、お前さ今暇なのか？」

まあ、立ち読みしてたしそうなんだろう。

「時間ならたっぷりあるわよ！」

そんなこと嬉しそうにいつてもな……………。

お前もうちょっとお嬢様らしい趣味持てよ、とは言えない。

「そうか、ならこの人の車停めた駐車場探してくれねえか？」

「いやあ、何処に停めたか分からなくなってしまったね」

覚えとけよ、そのぐらい。

「何で私がそんなことしなくちゃいけないのよ！？」

「だって暇なんだろう、お前」

上条と御坂の凄まじい口論が始まった。

というよりは御坂が突っかかってるだけか。

二人に放つとかれている女性が今日は暑いとかいいながらボタンをはずし始めた。

………って何当たり前みたいに済まそうとしてるんだ俺？
あ、脱いだ。

「ちょ、何をやっているんですか？」

「いや、だって今日は暑いだろう？」

「まあ確かに」

確かに今日は暑い。

立ってるだけで倒れそうだ。

「お前は何でそんなに落ち着いてるんだよ！」

「だって別にこの人が脱いだところで俺が恥ずかしいわけでもない
警備員アンチスキルに捕まるのは俺じゃない」

「いや、まあそうだけど……っていいから服を着てください！」

上条が女性の服を取って目を逸らしながら押し付ける。

しかし、まあ何か上条が女性を襲っているようにも見える。

「きゃあああああ！大変よ！女の人が襲われてる！」

「あの男の人が襲ったのよ！」

それは違うぞ。

いや、まあ確かにそう見えるかもしれないが。

「な、ご、誤解だーーーーー！」

上条がゴキブリのように早く走り去る。
よし、俺も逃げよう。

「はあはあ、何とか大丈夫か？」

「もう大丈夫だろ」

「そうか……って何でお前が付いてきてるんだよ!？」

「俺の勘があの人には関わらない方がいいと」

あんなところで犯罪者のレッテルを貼られるのはごめんだ。

「ふうん、そーいやお前今から暇か？」

「ん？まあ、暇だと思うが」

「ならちよつと付き合っで欲しいんだけど」

上条がニヤ／＼と笑ったのに俺は気が付かなかった。

バーゲン、それは戦場である。

限られた商品を求めて人々が死闘を繰り広げる。

外なら主人公は主婦だろうがここでは主人公は貧乏学生である。

「何だこの熱気は……………」

これが貧乏学生の節約をしたいという思いか…………。

「狙いは卵だ、頼んだぜ！」

「やれるだけはやってみよう」

能力全開で行くしかない…………。

「それでは今からバーゲンを開始します！」

開戦の合図が鳴った。

「うおおおおおおお!!!!!卵は俺の物だあああ!!!!!!」

誰かが雄叫びを上げた。

後ろから砲弾のように手が伸びてきた。

それを逸らして腹に拳を入れて沈める。

「まだだあああああ!!!」

連続の拳が俺に襲い掛かる。

それはまるで何処かの神拳のようだ。

だがこちらも負けられない。

全て捌く、捌く、捌く。

そして、相手の攻撃が止むと次はこちらが攻撃する。

腹に蹴りを入れて纏めて五人ほど吹っ飛ばす。

目標まで後10m。

「白鞘！飛べ！」

上条に言われた通り目標まで飛ぶ。

その途中いろいろと投げられたが全部無視していく。

「目標、確保」

人々を乗り越えて遂に目標にたどり着く。

俺の勝利だ。

「やったな、白鞘」

上条が俺の肩に触れる。

その瞬間、何かを壊したような甲高い音が響いた。

そして、突然能力が切れた。
当然俺は人の波へと消えていった。

「ひどい目にあった……」

「悪かったな、あんなことになっちまって」
畜生、上条なんかこければ良いのに。
あ、本当にこけた。

「ああー！折角、バーゲンで買った卵が！」
可哀想に……。
言っとくけど俺のせいじゃないぞ。

「ああゝ！見つけたわよ！」

ここでもさかの御坂登場。

「さっきはよくも人を置いて逃げたわね！大変だったわよ！汚れたスカート脱ぎだすわ、仕様が無いから洗ってあげるわ、拳句の果てにはツン……」

ツンまで言って御坂の顔が真っ赤になっていく。

「ツン……？」

「何でもないわよ！兎に角、勝負よ！」

「勝負って……今までお前の全戦全敗じゃねえか」

「私も喰らってないから引き分けよ！」

「じゃあいつになったら終わるんだよ？」

「私が勝つまで」

うわゝ、悲惨だな。

私が勝つまでって……。

上条がさっきより大きいため息をつく。

「分かったよ、そこまで言うなら相手になってやる」

場所は変わって河川敷。
対峙するのは上条と御坂。

「こっちはいつでもいいぜ」

「いくわよ！」

御坂がいきなり電撃を飛ばす。しかし、突き出された上条の右手がそれを打ち消した。
どうやら上条の話は本当だったらしい。

『どんな能力も効かない男』の正体はアイツってことか。

「だったらこれはどうよ！」

御坂の手元に砂鉄が集まっていき一つの剣のようになる。
ブォーンと振動しているのがとても怖い。

「砂鉄が振動してるから当たったたらちょっと血が出るかもね！」

「いや、ちよっとていうかそれ完全に大怪我するぞ！」

頑張れ上条。危なくなったら助けるから。

しかし、御坂の能力は本当に応用力が高いな。

御坂が得物を振り回すが上条はギリギリで全部避けている。

そして上条の右手が触れるとやはりただの砂鉄に戻ってしまう。

「なら、これならどうよ！」

「お前！空中の砂鉄まで！」

大量の砂鉄が上条に襲い掛かる。

「こんなの、何回やっても同じだろ！」

上条が右手で砂鉄に触れて大量の砂鉄をバラバラにする。

しかし、その間に御坂が上条の懐に入って右手を掴む。

これで御坂が電流を流して勝ちか、と思ったがいつまでたっても電流は流れない。

御坂が困惑していると上条が左手を振り上げる。

「きゃ！」

御坂が思わず顔を覆うがいつまで経ってもパンチは来ない。

「うわー！参りました」

「へ？」

上条がいきなりヘナヘナと倒れこむ。

なるほど、御坂のプライドを傷つけないように……。でもそれは逆効果だ。

「ふ、ふ、ふ、ふざけんなああああ！！！！」

「うわ！」

やっぱり。御坂が怒って電撃をバッチンバッチン飛ばす。

もちろん上条は逃げる。そして御坂が追いかける。そして忘れられる俺。

……………帰るか。

お財布の鳴くところに（後書き）

どうも爪竜連牙斬です。

大変お待たせいたしました。申し訳ございません。

次回は超電磁砲の6話か7話かどっちかです。

それでは次回もお楽しみに！

風紀委員ですの！

「アンタは私のママかあああ！！！！」

いや、違うからね。皆勘違いするなよ。
これ俺に言ってるんじゃないよ。

「ねえ！どう思う！？初春さん！」

怖いです、御坂さん。

「え、えっと、とりあえず座りませんか？御坂さん」

「え？」

周りを見ると皆不思議そうにこちらを見つめている。

「え？あ、ああ、あははははは！」

御坂も今気付いたようで笑いながら笑いながら席に着く。

「多分ですけど、白井さんは御坂さんを危険なことに巻き込みたくはないんですよ」

「危険ねえ」

「その虚空爆破事件グラビトンにしたって」

「何だ？その虚空爆破事件って」

グラビトンって重力子の何かだった気がする。
俺がいろいろ考えていると初春が説明してくれた。

「虚空爆破事件っていうのは簡単に言うたアルミを爆弾に変えてそれを爆発させてる事件です。
該当する能力は『量子変速^{シンクロトロン}』。それもLEVEL4以上のです」

「だったら書庫^{バンク}で調べれば」

書庫^{バンク}。学生達のデータが網羅されていて誰がどんな能力を持っているかも分かる。
しかし俺の予想はすっかり外れていた。

「それが量子変速のLEVEL4の能力者にはアリバイがあって……」

なるほど。それで捜査が難航してるって訳か。

「話を戻しますけど、最初はゴミ箱の空き缶とかだったのが、最近じゃぬいぐるみや子供用のカバンみたいな警戒心を削ぐような物にアルミを仕込んだりして」

「ひっどいことするわね」

本当だ。愉快犯だとしても全く笑えない。

「だからって訳でもないでしょうけど、白井さんは御坂さんのことを心配して」

確かにな。白井は御坂にべったりだし。

「お待たせ致しました」

「あっ」

店員がとても大きいパフェを持ってきた。
ふ、中々美味そうだな。

「わあ、来た来た！いっただっきまゝす！」

「うゝいはゝる！」

ここでもさかの白井登場。

今、風紀委員の仕事ジャッジメント中なのか。

白井が御坂を睨むと御坂は顔を背けてしまった。

「こんなところで油を売るとはいい度胸ですの。さ、パトロールに行きますわよ」

「あっ、はい。あっ、でもパフェが、パフェが」

「初春、素直に従つといた方がいいぞ」

そのパフェは俺が食つといてやるから。

「私が初春さんに付き合つて貰ったのよ」

「ん？」

あれ？この流れは……。

「文句があるなら私に言えば？」

「どういたしまして、これは風紀委員の問題ですから」

「一般人は口出し無用ってわけ？」

「お忘れですの、お姉様？風紀委員のお仕事はお姉様が思ってたっしやるほど甘くはありませんのよ」

確かに面倒くさそうだよな、あの仕事。

「な、ちよつと！」

御坂が反抗しようとしたが白井は聞かずに店の外へ出て行ってしまった。

「何よ！二言目には風紀委員、風紀委員って！だったら私が不良やつつける前に来てみろっての！」

「上条とやってたら来れるんじゃないか？」

「な！う、うるさいわよ！」

いやゝ、耳まで真っ赤にしちゃって可愛いな。
もう少し大人しかったらちゃんとモテるだろうに。

「ん？」

御坂がテーブルに視線を落とす。
そこには風紀委員の腕章があった。

「困ったわね……。ま、後で返せばいいか」

いや、よくないだろ。

初春、風紀委員の腕章ないと風紀委員として相手にされなさそうだし。

「何を呑気にさぼっているの？」

後方から女性の声が響く。

振り返ると眼鏡を掛けた高校生くらいの女性が立っていた。

「えーっと、私？」

「あなた達でしょ？ 応援の人って」

えーっと、この人は何を言ってるんでしょうか？

「応援って……あ、ああ！」

なるほど、この人は風紀委員で腕章持ってる御坂を応援と間違えたわけか。

「あ、いえ、その、これはですね実はさっき後輩が忘れて……」

「ほら！ 早く腕章付けて！」

面倒だがさっさと誤解を解くか。

「あら？ あなた、腕章は？」

「え？ いや、俺は風紀委員じゃ」

「もしかして忘れたの？ はあ、何をやってるの？ もう今日は腕章無しでいいから行くわよ」

「行くなってどこへ？」

だから俺達は風紀委員じゃないんだって。

「何処って仕事に決まってるでしょ」

「仕事？ってことは」

「ねえ？あなた本当にどうしたの？そっういえば、見ない顔だけど…
…もしかして新人さんかしら？」

いや、違うって。

「はい！今日から配属になった御坂です！」

え？何？何乗ってんの、御坂さん。

「御坂？御坂ってどっかできいたような……」

「いや、あのですね、俺達は「せい！」

ぐふ。ちょ、鳩尾に肘撃ちを叩き込むな。

御坂め、何を考えている？

「あの先輩、お名前は？」

「私は177支部の固法美偉^{このりみい}」

「よろしくお願いします！固法先輩！」

その前に俺に謝れ。そしてその媚び声止めろ。

「こちらこそ……」

「はい」

「何ですか？コレ」

「どっからどう見ても箒だろ」

御坂よ、目でも見えなくなったか？
俺と同じように固法も首を傾げている。

「ここを片付けてくれって要請なの」

「えっと、その、私風紀委員なんですけど」

「そうよ、学生が散らかしたゴミは私達風紀委員が片付ける。研修

で習わなかった？」

あ、やっぱりボロが出始めたな。

御坂もハッと気が付いて慌てて誤魔化す。

「はあ、面倒だ」

「文句言わないで早くやって頂戴」

「はいはい」

とりあえず始めるか。

始めてから数分、コンビニの中の少年がそわそわしている。

周りをキヨロキヨロ確認したあと週刊誌を二つ手に取り中に……。

御坂のような女子中学生には見せられない少年の夢が詰まった本を挟んだ。

………バレバレのカモフラージュだな、オイ。

「ちょっと！待ちなさいよ！」

御坂の声が聞こえたので振り向いてみると御坂が少年に向かって電撃を放った。

えー？ちょっと何やっちゃてるんですか御坂さーん。

御坂の頭を固法が箒で叩く。

「え？」

「駄目じゃない！無闇に能力を使ったりしたら」

「でも！」

「でもないでしょ！治安や風紀を守ることと実力を行使することとは別問題」

ふうん、風紀委員って面倒くさいんだな。

不良の喧嘩を止めとけばいいもんだと思ってた。

「そうでした！確か研修で」

「研修以前に一般常識で考えて頂戴」

「あんまり責めないでやってくれ。コイツはいきなり人に電撃飛ばしたり自販機にキックしたりスカートの下に短パン履いてたりする常識という言葉から離れまくりな奴だから」

「何ですって!?!」

御坂がまた肘撃ちしてきたが受け止める。

「な!?! 大人しく喰らえ!」

「甘いな」

今度は電撃を放ってきたが能力で防ぐ。

その次は回し蹴りだったがしゃがんで避ける。

「いいかげんにして頂戴」

「う、すいません……」

また怒られた御坂がションボリする。

だが数秒後、瞳にやるきの炎を宿し復活する。

「私やってみせます! お仕事ちゃんとやってみせます!」

「え、ええ、頑張って……」

その後いろんなことがあった。
地図の読み方教えたり、ラジコン直そうとして間違えて壊したり、
路地裏でイチヤついてたカップルに間違えて御坂が突っ込んだり。

「はあ、私駄目じゃん」

「ああ、そうだな」

「……少しくらい否定してくれたっていいじゃない」

いつもの元気は何処へ行った？ 御坂 美琴。

「はい」

「あ、すいません」

「やっぱり研修と現場では勝手が違う？」

いや、その前に受けてないんです。

だからまあ出来なくて当たり前なんだけどな。

「ていうか、あそこまで地図音痴で加減知らずで空気が読めないと
は……」

「私も苦手だったわよ、地図の見方」

へえ、やっぱり誰でも最初は上手くないんだな。

「知ってる町でも意外と手間取るのよね」

「……フフ」

固法の話聞いて御坂に少し元気が戻る。

流石は風紀委員だ、人を励ますのも上手い。

そう思っていると固法の携帯が鳴る。

「はい、固法………え？ うん、分かった。私達も探してみるわね
……。探し物の要請が入ったわ」

固法が電話を切って俺達に告げる。

探し物か……また、面倒くさそうだ。

「探し物？」

「ええ、鞆ですって」

「鞆………それってもしかして子供用の鞆じゃありませんか？」

「あら、よく分かったわね。ピンクでお花の柄が付いてるそうよ」

女の子の鞆だろうか？それは早く見つけてあげないとな。

「ベンチに置いてあったのを犬が咥えて持ってちゃったんですって」

「い、犬があ！？た、大変じゃないですか！早くその犬を捕まえないと！」

何を焦ってるんだ、御坂は？
犬がどうしたってんだよ。

「そうね、途中で落っことされても厄介だし」

「落っことす！？」

「誰かに拾われて持ってかれるかもしれないし」

「持ってかれる……早く！早く回収しないと！」

だから何でお前はそんなに焦ってんだよ。

「あ、うん……そうね」

固法もタジタジだよ。

「ぬ、ぐぐぐぐぐぐ」

「ごめんねー！私じゃ通れなくて！」

ただ今御坂はビルとビルの間の狭い隙間を通っている。
確かに固法では通れそうにない。何処とは言わないが問えるからな。
その点御坂なら問えないで進める。といっても少々キツそうだが。

「私も結構ギリギリっばいです！………っきゃあ！」

「御坂さん！？」

「何か今足の多い虫が！………いやー！来ないで！」

お次は草むらの中。

「もう、一体何処にいんのよ」

「口より手を動かせよ」

「分かってるわよ………って、ひゃ！」

突然カバンを探していた御坂が悲鳴を上げる。

「どうしたの？」

「何か今、足の無い虫が……うわ、いやー！ー！ー！来ないでー！ー！」

そんなに虫が嫌いか、御坂。
まるでハナダシテイのジムリーダーだ。

次は橋の下。

「うーん、いないなあー」

ただ今御坂が下、固法が上の肩車で橋の横を搜索中。
何で御坂が下？そして、そんなところには犬はいないだろう。
と、そこへ御坂の前に毛虫が落ちる。

「へ……いやああああ!!」

「ちょ、暴れたら!」

ドスンという大きな音と共に御坂と固法が倒れた。

「何処行っただのよ」

「もしかしてもう手遅れとかな……」

「ちょ、怖いこと言わないでよ!」

しかし、これだけ探しているのに見つからないし。
やはりもう手遅れなんじゃ……。

「シカトすんな、コラ!」

「人にぶつかつたという謝りも無しか?」

後ろから不良がよく言うような台詞が聞こえてくる。
かなりのチンピラだな、あの台詞。

「そんな、そっちだって……」

ドスという鈍い音と共に少年の顔面にチンピラの拳が叩き込まれる。

「何勝手に口聞いてんだよ!」

更に少年の腹に蹴りが入る。

と、そこで御坂が仲裁に入るが気づくの遅くないか?

「ちょっと! 何やってんのよ!」

「ああ？チツ、風紀委員か」
ジャツジメント

「何でもねえよ！」

ここまでやつといて白を切るか……。

「何でも無いこと無いでしょ！二人がかりでこんなことして！」

「うるせえよ！……チツ、ガキが」

「ガッ！……我慢、我慢」

おお、御坂が我慢した。かなりの進歩だな。

まあ、御坂の頑張りに免じてここは許してやるか。

「大丈夫ですか！？」

「もっと早く来いよ」

少年はそう言って御坂を睨み去っていく。

とても感じの悪い奴だ。

確かに助けるのは遅れたが助けようとしてくれたんだから少しくらい感謝してもいいだろうに。

「何よアイツ……」

当然ながら御坂も同じような感想らしい。

風紀委員も感謝されてばかりじゃないんだな。

「御坂さくん！どう？見つかった？」

「ああ、いえ……」

「ここも駄目か……、あと探してないところっていったら……」

ワイワイガヤガヤと子供の騒ぐ賑やかな声がある。
そう、ここは公園だ。

「しゃ、洒落にならないですよ……もしこんなところに！」

「ん、犬が苦手な子もいるでしょうしね」

「いや、苦手とかそういう問題じゃなく」

「そうね、万一噛まれてもしたら」

「だから！それどころじゃ！」

「とにかく探しましょ！御坂さんはそっちね」

「つてスルーですか！？」

「頼むわね！」

……何気に無視されたよね、俺。
しょうがない、俺も探すか。

「お姉ちゃん、風紀委員ジャッジメントの人？」

「わゝ、常盤台中学の制服だゝ」

「お嬢様だ！」

ガバツという音と共に何者かが御坂のスカートを捲る。

「スカートの下に半ズボン穿いてる！」

「何でこんなの穿いてんだ？」

「普通のパンツ持ってないの？」

……子供って時に残酷だよな。

「あ！犬だ！」

犬？もしかして……。

「居たー!」

御坂の声に反応して犬が走り出す。

「固法先輩!」

「ちょっと待ちなさ……アツ!」

風紀委員でもこけるんだな。

って、こんなこと考えてる場合じゃないな。

「任せて下さい!」

あ、じゃあ任せます。

「って、速! 仕方ない……!」

御坂の前髪から電撃が放たれる。

放たれた電撃は電灯を破裂させた。

「よっしゃー! 捕まえた!」

犬が驚いてる隙に御坂が犬を捕まえる。

が、犬が咥えていたはずの鞆が無い。

「上ー!」

「うっそー!」

どうやら驚きすぎて鞆を放り出してしまったらしい。
それに気づいた御坂が噴水へと走り出す。

「舐めんなあああ!!」

ザパーンという音と共に盛大な水飛沫があがる。

「目標無事です！」

噴水の中にはずぶ濡れの御坂と水滴の付いていない鞆があった。
普通そこまで頑張るか？

「ご苦労様」

固法が微笑みながら鞆を受け取る。

「ちょ!そんな雑に扱っていいんですか?爆発物処理班とか呼ばなくていいんですか!」

「爆発物？」

「処理班？」

「もう失くしちゃ駄目よ」

「うん！」

どうやら御坂は鞆を爆弾だと思い込んでいたらしい。

「お疲れ様でした」

「流石は固法さんですの……って白鞘さん？ 貴女が何故ここに？」

「いろいろとあったんだよ」

俺、ほとんど何もしてないけどね。

「見つけたのは私じゃなくてあっち」

「お姉様！？」

「あら？ あなた達、御坂さんとお知り合い？」

「知ってるも何も」

「御坂美琴さんですよ、常盤台中学の」

「御坂美琴……って、あの『超電磁砲』！」
レールガン

流石だな、御坂。かなりの有名人だ。

「でも、どうして御坂さんが？」

「何故あのような濡れ濡れのグチヨグチヨに？」

「彼女ね、噴水に飛び込んでまで鞆を守ってくれたのよ。どうやら鞆を爆弾と勘違いしていたそうよ」

微笑みながら言う固法。

そこで初春が御坂の腕に付いている腕章に気づく。

「あ、あれは」

「全くお姉様ったらあれほど言い聞かせましたのに」

「でも、ちょっと御坂さんらしいかも」

「だそうだ、御坂」

さっきからずっと落ち込んでいる御坂に話しかける。

「うわ！く、黒子！？えっと、これは……」

「そんなに慌てなくてもいいわよ、常盤台の『超電磁砲』さん」
レールガン

「はあ……って、ええ!? バレてる!?」

御坂が慌てふためいて二人にいい訳を開始しようとする。

「ほら、こっち!」

「……お姉ちゃん! ありがとう!」

女の子が満面の笑みでそう言った。

「あゝ、えと、その………どういたしまして」

そう返した御坂の顔も照れが混じった可愛い笑顔だった。

風紀委員ですの！（後書き）

お久しぶりです。

相変わらずの更新速度の遅さ……。

反省します。

多分『幻想御手』まで超電磁砲ストーリーです。
それでは。

私だって頑張った！頑張ったんですよ！

「あゝ！もう！せめてもう少し手がかりがあれば……」

「そうですよね、分かっている事と言えば大能力者（レベル4）以上の能力者ってことぐらいですし」

「でも書庫^{バンク}に該当者は無しですし」

白井が顎に手を当てながら呟く。

「俺みたいに外から入ってきた奴は？」

「白鞘さんみたいに外から来ていきなり大能力者以上なんてほとんど有り得ませんわ……って、どうして白鞘さんがここに？」

「ま、ちょっと追われてて……」

「なるほど……誰に追われているのかは問いませんが余りそういう私事で入らないようにしてくださいの」

「分かった。悪かったな」

フツ、ここに居ればいくら黄泉川でも分かるまい。

「それで、進展はあったのか？グラビトン事件」

「それがさっぱりですよ、先ほども言った通り分かっていることは犯人のレベルだけ」

「場所とかの関連性ありませんし………やっぱり根気よく、一から遺留品に当たりましょう！」

「そうですわね！」

この二人を見ると学園都市の治安はやはり風紀委員ジャッジメントのおかげだと思
う。

と、そこへ突然扉が開いた。

「ちょっと、失礼するじゃんよー。人の搜索を頼みたいんだけど……って、居たじゃんよ！」

「ちっ、見つかったか」

さて、窓から逃げるかと考えていると突然体が仰向けになった。

一瞬だけ何が起こったか分からなかったが直ぐに白井の『空間移動』レポート
だと気づいた。

「はい、確保。ご協力感謝するじゃんよ」

「白井……信じてたのに何故？」

「前に黄泉川さんから逃げるのにここを使うのは止めて下さいと言
った筈ですよ」

というか俺は何回補導されれば気が済むのだろうか？

というか毎回俺が悪い訳じゃないのにとりあえず捕まえやがって。

「文句言っていないで来るじゃんよー。超能力者（レベル5）が喧嘩

する度に出動させられるこっちの身にもなって欲しいじゃんよ」

「前から思ってたんだけどよ、風紀委員も警備員アンチスキルもよくやるよな。給料が出る訳でも無いのに」

「警備員になる理由には色々あるけど、大体の人は子供を守りたいって思う気持ちからやってるじゃん」

「風紀委員も周りからは変わってると言われますが皆それぞれの信念を持って行動しているんですのよ」

得意そうに胸を張りながら言う黄泉川。
それに続いて白井も誇らしそうに言う。

「じゃ、その信念ある風紀委員の邪魔をしない為にもさっさと付いて来るじゃん」

「はいはい、分かりましたよ」

文句を言いながらも黄泉川について行き風紀委員の177支部が出る。

「そういえば、例のグラビトン事件は警備員の方じゃ調べてないのか？」

「こっちはこっちで調べてるけど風紀委員とは協力体制は取ってない」

「話は変わるけどお前ってさ結構不良から恨み買ってるだろ」

「ま、職業柄しょうがないことじゃん」

そう言って苦笑する黄泉川。警備員も大変だな。

「警備員とか風紀委員とか頑張ってるのに結構不満持ってる奴いるんだよな」

「何だか知ったような口聞いているけど何か変な物でも食った？」

「……とりあえず一発ぶん殴っていいか？」

「冗談じゃんよ。怒らない、怒らない」

少し真面目な話をするとう直ぐにコレだ。

「しかし本当にどうしたじゃんよ？」

「いや、外でもこっちでも不良ってのは変わらないなと思ったただだ」

「やっぱり外でもこんな感じ？」

「外だと能力が無いからやり方がもう少し地味だけだな」

はあ、さっさと事情聴取という名の説教を終えて帰りたい。

時は過ぎて翌日。

今日もまた風紀委員の177支部に来ている。

あの後、黄泉川にグラビトン事件の情報を見せて貰った（黄泉川が居ない時に勝手に見た）が被害者側に共通点があることに気づいた。もしかしたら偶然かもしれないので一応白井にもう一度見せて貰いに来たのだ。

「そういえば初春はどうしたんだ？」

「初春はお姉様達と一緒に買い物に行きましたわ」

「白井は行かなくて良かったのか？」

「私はこちらをもう少し調べたくて」

本当に仕事熱心だな。いつもの変態ぶりが嘘に見える。

「それで、どうかしましたの？いきなり話があるとか」

「このグラビトン事件ってさ、これだけの被害なのに一般人にはほとんど被害者が居ないよな。それって風紀委員が庇ってるからだよね」

「ええ、恐らくそうだと思います」

「でもいくら何でもおかしいと思わないか、この人数。犯人が本当に無差別的にやってるなら風紀委員だけじゃ対処が追いつかないから絶対に一般人の被害も出てる筈だろ」

そこまで言って白井も気づいたようだ。

「つまり、犯人は風紀委員を狙っている？」

「ただの偶然かもしれないがその可能性は高いと思う」

「でも、だとすると誰が何のために？」

「そこが分からない。単純に風紀委員を狙ってるだけなら武装無能力^{アウトル}集団だと思いがレベル4以上っていうのがな」

白井も俺もそれ以上が分からず考え込む。

武装無能力集団ならレベル4以上というのは有り得ないだろうしか
といってレベル4以上なら風紀委員に恨みを持つことなんてないだ

ろう。

「衛星が重力子の加速を確認しましたわ！場所は第七学区の洋服店、セブンスミスト！」

「とりあえず初春を呼べ」

「分かりましたわ！」

白井が焦りながら小さい近未来的な携帯を取り出し初春に電話を掛ける。

何回か呼び出し音が鳴った後に初春が出たようだ。

「初春！？グラビトン事件の続報ですの！学園都市の監視衛星が重力子の爆発的加速を観測しましたの！今、近くの警備員に現場へ急行させるよう手配させていますの！貴女は速やかにこちらへ戻りなさい！」

『観測地点は！？』

「第七学区の洋服店、セブンスミストですの！……初春！？もしもし！もしし！」

「おい、何があった？」

「大変ですの……初春は今、セブンスミストにいるらしいんですの！」

白井が焦燥の表情を浮かべながら驚愕の真実を告げた。

「てことは今回の標的は初春か……セブンスミストの位置は何処だ？」

「セブンスミストはここからそう遠くは無いですが……」

「なら急ぐぞ、犯人は近くに居る筈だ。白井は犯人を捜せ。俺は初春の保護と爆弾の処理に行く」

「本来一般人を巻き込むべきではないですが分かりました。それではお願いしますわ！」

白井が空間移動を使ってセブンスミストへ向かい、俺は窓からビルの屋上へと跳ぶ。

少し跳んでいると人が集まっている場所が見えた。恐らくあそこだ。ビルの扉前に着地すると急いで中へと入る。

一階、二階と上がった所で何故か御坂と上条に遭った。

「白鞘！？なんでここに！？」

「それより初春を見なかったか？今回の標的はアイツ、つまり爆弾もアイツの近くに置かれてるはずだ。早くしないと初春が危ない」

上条達に事情を説明している内に三階へと着く。

フロアの真ん中に花飾りが見えた。間違いない、初春だ。

初春は小さな少女から気味の悪いカエルの人形を受け取ろうとしていた。

しかし、人形はドンドン歪に縮んでいった。恐らくアレが爆弾なのだろう。

御坂が走って超電磁砲放とうとするがコインを落としてしまった。不味い、間に合わないと思っていると横に彼が居たのを思い出す。

「上条、悪い」

横で俺と同じように固まっている上条の制服を掴み思いっきり投げる。

上条は一瞬慌てたが綺麗に着地して右手を前に突き出す。直後、店内に爆風が広がった。

「それで、結局犯人は御坂に捕まって事件は解決と」

「ええ、ご協力感謝しますわ。どうです？これを機に風紀委員に入ってみては？」

「考えとく」

といっても入る気はさらさら無いが。

結局あの後、店内であの人形を持っていた人物を御坂が見つけて一発ぶん殴ったらしい。

「でも、あの介旅って奴はレベル2だろ？あの威力、レベル2の威力じゃなかったぞ」

「そこですの。今回の事件、終わってみてもそこだけが分からないんですのよ」

白井がうーんと唸りだす。だが俺は一個学ぶ事があった。

能力ってのは使い方一つで十にも一にもなることが。

そして、こんな能力を持っている俺は実はかなり危険なのではないかという事にも気が付いた。

そう考えるとこれまで以上に自分の行動に注意しなければと思う。

「強大な力ってさ、一になったときが怖いよな」

「ええ、ですから私達も注意して生活しなければなりませんわね。今後、このような事件を起こさない為にも」

この時の俺はまだ知らなかった。

強大な一がその身に迫りつつあることを。

私だって頑張った！頑張ったんですよ！（後書き）

今回はちゃんと活躍したぜ主人公！

と、自分の中では思ってます。

若干アニメの内容と違いますがそこは気にしないで頂けると幸いです。

最後のアレは……フフフ。

それでは次回もお楽しみに！

優先する、本文を上位に！サブタイトルを下位に！

「毎年のことながら夏は暑いな」

俺はこの夏が嫌いだ。暑いし、汗は掻くし、昼が長いし。

学園都市は街中にもエアコン付いてないかとか仕様も無い期待をしていたがやはり現実には甘くはない。

そう考えていると目の前にカキ氷屋が見えてきた。暑いし買うか。いくつか種類があって迷うがどうせなら甘い物が良い。というわけでイチゴ味に大量のシロップを掛ける。

「あら？白鞘さんではありませんの」

後ろから聞き覚えのある声がした。

「白井に御坂か。お前らもカキ氷？」

「そ、黒子が例のグラビトン事件について煮詰まってるらしいからね」

「というと、あの書庫に登録されてるレベルと被害状況の喰い違いつて奴か？」

「ええ、実は以前からこういう事件はあったんですのよ」

白井と俺が話してる間に御坂がカキ氷を買ってきたようだ。とりあえず座る為に空いているベンチを探す。

ちょうど木陰に隠れているベンチを見つけた。

カキ氷屋に付けられた風鈴の音がとても涼しく感じられる。

「不思議なものですわね。風鈴の音を聞くと涼しくなる」

「共感性って奴ね」

「共感性？」

「一つの刺激で複数の感覚を得ること」

首を傾げる黒子に答えてやる。

一つの複数で複数の感覚を得ること、例えば赤系の色を見ると暖かく感じたり青系の色を見ると冷たく感じたりといったものだ。

「あれ？御坂さんに白井さん？白鞠さんまで！カキ氷ですか？美味しそう！」

「お前も買ってきたらどうだ？」

「あ、じゃあそうします！」

偶然にも佐天と会った。佐天は俺達のカキ氷を見て自分もと買いに行ってしまった。

数分後、戻ってきた佐天の手にあるのはレモン味のカキ氷だった。カキ氷の中にストローを挿して口に運ぶ。

すると彼女はこめかみの辺りを押さえて足をじたばたさせる。

「それって最早夏の風物詩よね」

「分かってるけど食べたくなっちゃうんですよね」

「そういえば初春は？」

「初春は今日、風邪で学校を休んだのでこれからお見舞いに行く所なんです」

佐天が風邪薬を見せながら俯く。

と、そこで何か思いついたように顔を上げる。

「そうだ！御坂さん達もお見舞いに行きませんか？」

「と、言う訳でお見舞いに来ったよ〜ん！」

「「「お邪魔します」」」

俺達は今、初春の見舞いの為に初春の家に来ている。

「ありがとうございます、皆さん」

二段ベッドの上から初春が上半身だけ起こして挨拶する。

「気にしない、気にしない。熱測るからちょっと動かないで」

佐天が二段ベッドの梯子を上り初春の耳に体温計を当てる。

体温計は一瞬でピピッと鳴り初春の体温を表示する。

「37度3歩、微熱だけど今日は一日中寝てること。もうお腹出して寝ちゃ駄目だよ」

「寝てません！佐天さんがいつもスカート捲るからです」

「いや、そりゃだって親友がちゃんとパンツ穿いてるか気になるじゃないですか？」

「穿いてます！」

「はいはい、病人は静かに」

佐天の言葉に反論した初春だったが御坂の言葉で大人しく引き下がる。

「冷たいタオル、作ってきてあげるね」

「あ、そうだ白井さん。グラビトン事件の方、何か進展ありました？」

「あるといえばある、ないといえはないですの」

お茶の入ったコップを置いて白井がため息を吐く。
それを聞いて初春は不思議そうな顔をする。

「分かったのは犯人が異能力者（レベル2）だということ」

「でも、あの爆発は大能力者（レベル4）以上のモノ」

「それはつまり分からないことが増えた、ということですか？」

「ま、そういう感じですよ」

白井が先ほどより大きいため息を吐く。

すると御坂が佐天の方へ振り向いた。

「そういえば佐天さん、前に幻想御手^{レベルアップ}がどうか言ってなかった？」

「え？」

「能力のレベルを上げる？」

「いや、だから噂ですって」

白井が胡散臭い通販を見たような声を上げた。
それに対し佐天は両手を振って噂だと強調する。

「実態もよく分からない代物ですし」

「実態が分からない？」

「そうですね、噂の中身もバラバラで本当に都市伝説みたいなものなんです」

佐天の話によると『レベルアップパー幻想御手』というのは名前以外ほとんど何も分かっていないらしい。

「ま、そんなに都合のいい物無いか」

「……………実は書庫バンクに登録された能力のレベルと被害状況が違うケースは今回が初めてじゃありませんの。常盤台狩りの眉毛女、銀行強盗パイロキネシストの発火能力者。お姉様が知っている事件だけでも既に二件。それ以外にもレベルと被害状況の違いがある事件が発生してますの」

「それって…………」

「『レベルアップパー幻想御手』ってマジ物なんですか？」

「何か他に知ってることはない？」

突然尋ねられた佐天は戸惑いながら自分の知っている情報を思い出す。

何か思いついたのか、手を叩きながら言う。

「『レベルアップパー幻想御手』を使った人達を書き込みをしてる掲示板があるとか……………」

「それ、何処の掲示板分かる？」

「え、え〜っと」

「これじゃないですか？」

佐天が戸惑っている間にカタカタカタツつとキーボードを打って初春がパソコンを見せてくる。

「あ！そこそこ！」

「お手柄ですわ！後はその連中の素性が調べられれば」

「素性は分かりませんがよくこのファミレスに集まってるみたいですよ」

初春がベッドから乗り出して画面の一部を指差す。

そこには『ジョナGに集まろうぜ』と書いてあった。

「ありがとう、初春さん！言ってみるわ！あ、お大事にね〜！」

「お姉様、それは私の仕事ですよ！ちょ、お姉様！」

溜まり場が分かると直ぐに御坂が家を出て走り始めてそれを白井が追いかけていった。

「あ、白鞘さんも一応付いて行ってあげて下さい。あの二人だと暴走するかもしれないので」

「分かった。お土産はここに置いとくから、早く体直せよ」

そう言って初春の家を出る。

下を見ると御坂と白井が走っていた。階段を使うのも面倒なので手すりを越えてそのまま地面に着地する。

「あれ？アンタも付いて来んの？」

「初春に御坂が暴走したら止めろって言われてな」

「ふーん、まあいいわ。行きましょ！」

御坂は俺の話に興味なさそうに答えるとまた走っていった。

「ここね……じゃあ行きますか」

「また、お姉様は……」

「アンタは風紀委員だから、面が割れてるかもしれないでしょ」

う、と言って引き下がろうとした白井だったが名案が浮かんだよう
でポンと手を叩く。

「それなら白鞘さんがいけばいいんですの！」

「「は？」」

突然すぎる白井の提案に御坂と俺の声がハモる。

「ちょっと待て。この作戦は御坂が可愛い女の子を装って連中
に近づき情報を入手する作戦だ。そこで何故俺の名前が出てくる？」

「失礼ですが白鞘さんはどう見ても女性にしか見えませんわ。それ
も飛び切りの美女。女性として悔しいですが脚も細くて長いし髪も
さらさら。大丈夫、イケますわ！」

行くか馬鹿。これ以上白井の寝言には付き合ってられん。

「大体、女の服装なんか何処にもないだろ。それとも何か？今から
買いに行くのか？」

「こんなこともあろうかと私、セーラー服を持っていますわ」

どんなことがあると思っただよ！と珍しく大声を上げて突っ込み
そうになったが抑える。

落ち着け落ち着けと自分に言い聞かせながら冷静に対処しようとす

る。

「サイズが合わないだろ」

「大丈夫ですわ。サイズはばっちり合ってますの!」

「何でだよ! お前はいつ俺の3サイズを知った!」

柄にもなく大声を上げてしまう俺。

この作品で台詞に『!』を『使うのは今回が二回目だ。……………多分。
(読者の皆、数えてみてね☆)』

「ふ、このお姉様の3サイズを常に把握するために鍛えられた魔眼に分からない3サイズはありませんわ」

「黒子、アンタとは後でたっぷり話さなきゃいけないらしいわね」

「兎に角! 着て下さいですよ!」

「着るかバカ。予定通り御坂でいいだろ」

話を打ち切って店内に入ろうと歩き始める俺。
しかし、まだまだ白井の猛攻は続いた。

「では、百歩譲ってチャイナ服ですわね」

「譲ってない! 全然譲ってない!」

「ではこの常盤台指定の競泳水着なんてどうですか?」

「どうですのもくそもあるか！そんなもん着て街中歩いてたら捕まるだろ！」

「注文が多いですわね。ならこちらの堕天使エロメイドなど如何です？」

「ぶっ殺して欲しいのか？お前」

俺のツツコミを無視して次々と服を取り出す白井。
本当に謝るから辞めてくれ。

「白鞘さん、私に『何かあったら手伝ってやる』と言いましたわよね」

「……………言ったな」

「今がその時ですよ！」

「どう考えても違う！」

「諦めて着なさいよ。早くしないと逃がすわよ」

御坂がにやりと笑いながら近づいてくる。

どうやら俺の退路は絶たれたらしい。

さよなら、皆。

「ちょ、アンタ、凄い似合ってるわよ」

「まさかこれほどまでとは……あ、初春達の為に写真撮ったときませんと」

「やったら冗談抜きで殺すぞ」

俺は今、セーラー服を着ている。しかも、このセーラー服がまた妙にエロい。

ていうか俺下着まで女物だからな。この苦痛がお前らに分かるか！

「行くぞ」

覚悟は決まった。もう戻れない。ならやるしかない。

「『レベルアップ幻想御手』について知りてえだあ？」

「ええ、ネットで調べたらここによく集まってるって分かったから」

「……分からない方もいるかもしれないから説明しよう。
この女みたいに喋ってるのが俺だ。」

分かってはいたけど、とんでもなく苛々する。

「タダで教えるわけにはいかねえな」

「もちろんタダで教えてもらおうとは思ってないわ。こう見えて私、経験豊富なのよ」

妖艶っぽく笑ってみる俺だが物凄く苛々しているので上手く出来ている自信は無い。

が、どうやら上手く出来ていたようで不良A、B、Cは頬を赤らめていた。

それを見て白井と御坂が離れた席で必死に笑いを堪えていた。

「そうだな、胸は小せえけど綺麗な顔だな」

「あら、女性のそんな所ばかり見る男はモテないわよ」

肩に腕を回そうとしていた男の手をくるりと華麗に回避する。

よく耐えてるよ、俺。ノーベル女装賞ぐらい貰えそうだが、貰いたくないけど。

「ハッ、貧乳には興味ねえんだよ。とっとと帰れ」

「胸だけが男を喜ばせる訳じゃないってことを教えて上げるわ、こう見えて私、啜えるのは上手いのよ。それに、お金も少しならあるわ」

ポケットから予め用意しておいたクレジットカードを見せる。すると、不良達はヒソヒソと内緒話を始める。

ていうか白井さん、コレ台本通りにやると凄い危ないです。

「ち、分かったよ！教えてやるから付いて来い」

不良三人が席を立ち上がり出口へと歩いていく。
あともう少し、あともう少しだ。我慢しろ、俺。

「さてと、ここらでいいだろ」

「あら、野外の方が好み？」

不良達に連れられて俺がやってきたのは変電所だった。

「まずは有り金を全部出して貰おうか」

「これくらいでいいかしら？」

財布の中から十万円ほど出して不良達へ渡す。

金額の多さに多少驚いたようだがクレジットカードの存在を思い出したようだ。

「そうそうクレジットカードもね。これだけで『レベルアップ幻想御手』の情報が手に入るんだから安いもんだよ」

「ああ、さっきのお金は『レベルアップ幻想御手』の情報の分じゃないわ」

「あ？」

不良達は不思議そうな顔で俺を見つめている。

「今からお前らを叩きのめす分だ」

脚力の威力を操作して一瞬で不良Aの懐へ飛び込みアッパーを叩き込む。

次に仲間が突然吹っ飛ばされて呆気にとられている不良Bを後ろ回し蹴りで吹っ飛ばし壁に激突させる。

やっと、状況を理解した不良Cが俺に文句を言う。

「デメエ！何しやる！」

「見れば分かるだろ。ていうかさっきも言っただろうが、お前らを叩きのめすって」

「は、すかしてんじゃねえぞ！パワーアップした俺達の力見せてやろうぜ！」

不良の号令と共に不良の仲間らしき不良がダンゴムシのようにわらわら出てきた。

わざわざサンドバッグが増えてくれるとはな。

「喰らえ！これがレベル2の！」

って、レベル2かよ！どうやら全員が介旅レベルという訳ではないらしい。

まあ、今の俺にはどうでもいいことだが。

突っ込んできた不良にカウンターを決めると、今度は別の不良達へ腕を振り、烈風を繰り出す。

それでもまだ一人残っていたようなので、踵落としを叩き込む。

「これで全員か……。サンドバッグご苦労様」

「随分と派手にやってくれたじゃないか」

背後から声が聞こえたので振り返ると、ジャージ姿の女が立っていた。

その雰囲気は姉御という言葉がぴったりだった。

「おい、お前達。あんな姉ちゃん相手に、何やってんだい？」

「あ、姉御」

ジャージの姉御は屈んで不良に話しかける。

「女の財布なんか狙いやがって……」

「す、すいません。でも……」

パァン！という音と共に不良の頬が叩かれる。
言うまでもなく叩いたのは姉御である。

「アタイに口答えかい！」

「す、すいません！」

姉御に叩かれた不良は慌てて謝る。
そして、姉御の号令により不良たちはピシッと綺麗に一列に並ぶ。
何処かの国の行進のように直立不動である。

「わ、悪かった」

「そうじゃねえだろ！」

「本当にすいませんでした！」

「「「「「っした！」「」「」「」

不良の一人が頭を下げるとそれに続いて他の不良も頭を下げる。

「これでケジメは付いたろ。許してやっておくれ」

「……………分かった」

本当はもう少しボコボコにしたかったが、ここまでされたら流石に許さない訳にはいかない。

そして、姉御によって不良たちは帰されてこの場には俺と姉御だけが残った。

「お前はアイツらの親分か？なら、『^{レベルアップ}幻想御手』のことは知っているな？」

「そんなことより、アタイの舎弟を可愛がってくれたんだ。覚悟は出来てるだろうね？」

さっきの態度とは打って変わって敵討ちをするという姉御。やっぱこの手の不良には話は通じないか。

「冗談は止めろよ。やる前から勝負は決まってるだろ」

「舐めたこと言ってくれるじゃないか……。レベルの違いが強さの違いじゃないって教えてやるよ！」

「レベル云々の問題じゃない。あの程度の不良も統率出来てないようじゃ、お前の器は知れてるって言ってるんだよ」

俺の言葉に怒りを露にした姉御は地面へ手を叩きつける。すると、アスファルトの地面が突然軟らかくなり、俺の脚が地面へ沈んでいく。

「驚いたかい？アタイの能力は『表層融解』フラックスコート。アスファルトの粘度を自在にコントロールできるのさ」

ご苦労なことにわざわざ解説してくれた姉御を無視して、脚を引っっこ抜こうとする。が、その前に姉御はさっきとは別にアスファルトを硬くして俺の脚を固定する。

「どうだい？これで勝負は決まったる」

「まだまだ勝利宣言には早すぎるだろ。こっちはまだ能力を使っていないし、遠距離攻撃なら勝負は決まってる」

「脚が抜けないなら移動は出来ない。アタイが能力を解除するまで、お前はそこから動けない」

「そうでもないぜ」

姉御が不思議な顔をしているのを無視して俺は拳を握る。そして、そのまま拳を地面に思い切り叩きつける。すると、俺を固定していたアスファルトは粉々に砕けて、俺の脚は解放される。驚愕している姉御を措いて、空中へと跳躍する。今度は腕と大気の威力を操作して姉御へ烈風を放つ。しかし、コレを姉御はアスファルトの壁で防ぐ。

「アンタの能力、肉体強化のような……」

「残念だがソイツは違うな。俺の能力は……」

「アンタの能力が何かなんて関係ねえ。アタイの鉄の意志！アンタ

の能力で碎けるものなら碎いてしろ！」

「威勢だけはいいようだな……。いいぜ、やってやるよ」

拳を握り直して勢いよく走り出す。対して姉御は手を地面に当ててアスファルトの壁を作り出す。距離を詰め、アスファルトの壁へと拳を叩きつける。そして……。

「結局、何にも聞けなかったな」

「白鞘さんが勝手に立ち去るのが悪いんですよ。しかも、あんな気障な台詞を残して」

「馬鹿言うな。あそこで殴ってたら婦女暴行で警備員と追いかけて
アンチスキル
こだろ」

結果は明快だった。俺の拳は易々と壁をぶち抜いた。そして、そのまま姉御の顔面を捉えるはずだった。

しかし、止まった。いや、正確には止めた。最後の最後で止めたのだ。

その時、姉御に言った台詞が女子中学生には気障だったらしい。

「だって、『お前の鉄の意志は、俺の拳を立派に止めたぞ』って。超気障ったらしいわよ！」

「そういえば白井。俺の制服は何処だ？」

「……………あ」

白井の顔に流量世界一のイグアスの滝のような汗が流れる。どうした、おいまさか…………。

「コインロッカーに放置したままですわ…………」

「はあ…………。分かった、俺が取りに行くから、鍵を渡してお前らはさっさと帰れ」

「申し訳ございませんの」

白井がテヘッと謝りながらゴソゴソと鞆の中を漁る。

次の瞬間、またもや白井の顔にイグアスの滝のような汗が流れる。

「失くしてしまいましたわ…………テヘツ☆」

…………泣いて、いいかな？

優先する、本文を上位に！サブタイトルを下位に！（後書き）

どうも、爪竜連牙斬です。

今回のサブタイトル……そうです。

サブタイトル考えるのが面倒くさくなったんですよ！

しかも、別に本文が上手い訳でも無いし……。

さて、今回は白鞘君が壊れました。

そろそろAIMバースト戦が近づいてきました。

そこまで多分活躍しませんね。

それでは次回もお楽しみに！

露出狂注意報

突然だけど皆に質問だ。

ただ今、俺の目の前では大脳学者によるストリップショーが披露されている。

俺はツツコミを入れるべきだろうか？

「な、何をしていますの？」

「いや、だって暑いだろう」

いや、そりゃ暑いけどやっていいことと悪いことがあるだろう。まさか、暑さのせいで常識が抜けてしまったのか？

「殿方の目がありますの！って、は！？」

突如、殺気を感じて後ろへと跳ぶ。すると、さっきまで俺の目があった場所に二本の金属矢があった。言うまでもなく白井が空間移動テレポートさせたのだ。

「白井、風紀を司る風紀委員が率先して風紀を乱してどうする？」
ジャッジメント

「いいからあっちを向いといて下さいな！早く！」

何故か正しい事を言った筈の俺が責められている。時々思うが男って弱い。

「下着を着けてても駄目なのか？」

「当たり前ですよ！」

白井が木山先生の服を直しながら言う。何故だろう？白井がまともに見える。

「木山先生に専門家として意見を伺いたいです」

御坂がやや引きつった声で話す。その顔には汗をびっしょり掻いているが、恐らく暑さのせいだけではないだろう。

「それは構わないが……ここは暑すぎる」

その後、木山先生のご要望により場所をファミレスへと移した。店内はクーラーが効いていてとても快適だ。

「さて、先ほどの続きだが……何故同程度の面積でも水着は良くて下着は駄目なのか」

「「いや、そっちではなく」」

木山先生の天然発言に俺達三人のツッコミが入る。

全く、露出狂の相手は手に負えない。

水着と下着について議論を始めようとしていた木山先生を止めて『
レベルアップ幻想御手』について説明する。

「それはどういったシステムなんだ？形状は？どうやって使う？」

「まだ分かりませんの」

「とにかく君達はそれが昏倒した学生達に関係しているのではないかと、そう考えている訳だ」

「はい」

返事をしながらジュースを飲む白井。その目には風紀委員として活動している時の真剣さがあった。

「で、そんな話を何故私に？」

「能力を向上させるということは脳に干渉するシステムの可能性が高いと思いますの。ですから、もし『レベルアップ幻想御手』が見つかったら専門家である先生に是非調べて頂きたいんですの」

学園都市で開発されている超能力は演算式を用いている。レベルの

高い能力者とは演算能力にも優れているということだ。つまり、能力を向上させる、ということは演算能力を向上させるということではないか、というのが俺達の考えだ。
気になる木山先生の反応は……

「むしろ、こちらから協力をお願いしたいね。大脳生理学者としての興味がある。……ところで、さっきから気になっているんだが、あの子達は知り合いかね？」

木山先生が指差す方向を見ると、そこには窓の向こうで必死にアピールをしている佐天とそれを笑顔で見ている初春の姿があった。

「へえ、脳学者さんなんですか。……ハッ！白井さんの脳に何か問題が？」

「『レベルアップ幻想御手のことについて相談していましたの』」

白井が忌々しそうに初春を睨む。しかし、白井の頭がおかしいことには俺も同感だ。まあ、初春の頭もある意味でおかしいけどな。アレ、造花なのか？

「あ、それなら」

「黒子が言うには、『レベルアップ幻想御手』の所有者を保護するんだって」

「どうしてですか？」

初春が不思議そうに御坂に尋ねる。

佐天が音楽プレイヤーを持ったまま固まっているがどうかしたのだろうか？

「まだ、調査中なので詳しくは分かりませんが、副作用があるかもしれない。それに容易に犯罪に走る傾向が見受けられまして」

「あ、どうかしましたか佐天さん？」

「え！？ううん！なんでもない！」

佐天が慌てて音楽プレイヤーをポケットにしまう。と、そこで運悪く佐天の手が置いてあったジュースに当たってしまった。そして、倒れたジュースはそのまま木山先生の方へと向かいってヤバイ。ビチャ、という音と共にジュースが木山先生のストッキングにかかる。

「ごめんなさい！」

佐天が慌てて謝る。木山先生は特に気にした様子もなく、俺達の予想通りストッキングを脱いだ。

そして、俺が取るべき行動は……

ヒュ、という音が聞こえたと思うと先ほどまで俺がいた場所に大量の金属矢が打ち込まれていた。

やはり白井は俺を攻撃してきたか……。だが、俺は別に木山先生の下着姿に興味は無いぞ。

啞然としている佐天と初春を置いて白井が大声でツツコミを上げる。

「だから！ 人前で脱いじゃ駄目だと言ってますでしょうが！」

白井、顔が凄いことになってるぞ。

「しかし、起伏に乏しい私の身体を見て劣情を催す男性など……」

木山先生、御坂が泣きそうなので止めて下さい。

「趣味嗜好は人それぞれですよ！ それに、殿方でも歪んだ情欲を抱く同姓もいますのよ！」

白井……それ、お前のことだろ。

「お忙しい中、色々教えて頂きありがとうございました」

「いや、こちらこそ教鞭を揮っていたころを思い出して楽しかったな」

「教師をなさっていたんですか？」

「むかしね」

木山先生は思わせぶりな笑みを浮かべて帰っていった。

しかし、木山先生が教師か……。想像できない、というよりしたくない。あんな露出狂が先生やってたら生徒に悪影響を及ぼすだろう。何か違う意味で。

「何というか、ちょっと変わった感じの方ですの」

「白井さんよりですか？」

ムツとした顔で初春を睨む白井。
しょうがない、フォローしてやるか。

「失礼だぞ、初春。木山先生に」

「どういう意味ですの!？」

もちろんそのままの意味だ。どう考えたって白井の方が変態だろう。

「じゃあ、俺も帰るな」

憤慨する白井を無視して俺は帰り道を歩いた。

「白井じゃねえか。どうしたんだ？」

「あら、白鞘さん。奇遇ですわね。少し世間話といきたいところで
すが生憎と私、急いでおりますの」

「何かあるのか？」

「今、『レベルアップ幻想御手』の取引場所を虱潰しに探しているんですの」

『レベルアップ幻想御手』の取引場所か……。面倒くさそうだな。

「そうか、じゃあ頑張れよ」

「ええ……って、一緒に来てくれませんか？」

「白井一人でも何とかなるだろ」

白井は『大能力者（レベル4）』の『空間移動』テレポートを持っている。そして、白井自身も富貴委員として格闘術の心得もあるはずだ。なら白井に勝てる相手など殆ど居ないだろう。

「確かに私自身、自分の能力には幾らかの自信を持っておりますが……実は、それだけでは対処しきれなくなってきているんですの」

「どういうことだ？」

「時々話ですが貝旅級、つまり大能力者級の能力者もいますの」

「成る程……パフェ一つで手伝ってやるよ」

無料で手伝ってやればいいのにか思った奴。この世はそんなに甘くない。

白井はうーん、と考える素振りを見せてから答えた。

「分かりましたわ。それではご同行お願いします」

「ああ」

現場に着くと佐天がいた。どういう経緯か知らないが不良達に暴行を受けていた。

何があったか知らないし知る必要もない。どうせ俺がやることに変わりはないのだから。

こいつらを全員叩きのめす。

「白井、こっから先は個人の喧嘩になるんだが、見逃してくれないか？」

「白鞘さん？一人でやりますの？」

「ああ」

白井にそう告げて一歩前へ踏み出す。不良達はこっちに気づいたように皆怪訝な顔をしている。

不良達を無視して佐天の元へと近づく。佐天も何が起きているのか分からず、不思議そうな表情をしている。

そんな佐天の頭をグシグシ、と撫でてやる。

「よく、頑張ったな。向こうで白井が待ってる。後は俺に任せろ」

「白鞘さん……」

まだまだ呆けている佐天と被害者らしき太った男を白井の下へと送り届けようとする。

すると、不良達にガシツと肩を掴まれた。

「オイオイ、何勝手に人の金づる横取りしちゃってんですか？」

「放せ」

「ああ？」

ドゴツという音が響いた。

俺が拳を不良の腹へと叩き込んだ音だった。不良はそれだけで十メートルほど吹っ飛んで壁へと叩きつけられる。

「お前らに選択肢をやるよ。大人しく『レベルアップ幻想御手』を渡すか、爆笑
オフジェ必至の死体になるか」

「何お前？調子に乗ってんのかよ？まあ、丁度いい。テメエを爆笑
必至の死体に変えてやるよ」

不良の一人がこちらへと走ってくる。その背後には浮遊している多
テレキネシス数の鉄パイプがある。恐らく『念動力』の類だろう。

相手の能力も分からずに突っ込んでくるなんて馬鹿な奴だ。
飛んできた鉄パイプの一本を掴むと、脚力の威力を操作して相手の
懐へと一瞬で飛び込む。そして、驚いている不良の顔を思いっきり

殴りつける。ゴギツという嫌な音がした。恐らく、頬骨が折れたのだろう。

そして、最後の一人へと向き直す。

「面白え能力だなあ。何て言うんだ？」

「答える必要はないと思うが」

質問を無視されたにも関わらず男は全く苛々していなかった。別に大した興味はなかったらしい。

「俺達はよお、この力を手に入れる前までは、お前らみたいな能力者からビクビクしながら生きていたんだよ。だから、力を手に入れたらお前らを逆にギッタンギッタンにしてやろうと思ってたんだぜ」

「面倒臭い事考えてるんだな。出来もしない幻想抱くのは止めいた方がいいぜ」

男はニタリ、と笑うと走って近づいてくる。その速度はとても遅かった。ため息を吐きながら蹴りを放つ。これで終わりだ。しかし、予想外のことが起こった。

俺の脚がありえない角度で曲がったのだ。直後、不良の蹴りが飛んできた。速度も威力も大したことはないだろう。そう思って、不良の足を掴もうとする。しかし、またもや不良の足が不自然な方向へと曲がった。

「お前の能力……」

「分からねえか？まあ、しょうがねえか」

「いや、分かったよ。お前の能力は光を操って別の所に焦点を結んでるだろ」

不良は一瞬驚いたような顔をしてから、また余裕そうにニタリ、と顔を歪ませる。

どうせ、俺の攻撃は届かないと思っっているのだろう。

「トリックアート『偏光能力』 つつうんだけどな。だからって、お前に何が出来る？」

「お前の能力はあくまで見ている物の像を誤魔化してるだけだ。なら、対処方法は簡単だ」

そう、見ているものが嘘なら対処は簡単だ。

目を瞑ってしまえばいい。

目を瞑って視覚情報を無視してしまえば向こうの小賢しい能力に惑わされることはない。

目で見えないならどうやって相手の位置を特定するのか？これも簡単なことだ。

聴覚、嗅覚、触覚、更には第六感を使って気配を感じればいい。

「漫画じゃあるまいし、目を瞑って戦えるわけねえだろお！」

不良がまた蹴りを繰り出してくる。蹴りの風を切る音を聞いて大体の位置は分かった。

俺は向かってくる蹴りに対して、肘鉄を放つ。ゴキツという骨の折れたような音と不良の悲鳴が聞こえてくる。

これで相手の戦意は失われただろう。後は、『レベルアップ幻想御手』について

聞き出すだけだ。

「さて、『幻想御手（レベルアップ）』を出して貰おうか？」

「わ、分かった！分かったからもうこれ以上は！」

不良はガクガクブルブルと震えながらポケットから音楽プレイヤーを取り出す。って、音楽プレイヤーかよ。

「もう2、3本いっとくか？」

「ち、違うんだ！『レベルアップ幻想御手』ってのは曲なんだよ！」

『レベルアップ幻想御手』は曲？想像していた物とは違うな……。

とにかく、こいつを白井に突き出して俺はさっさと帰るか。
と、考えていると周りからサイレンが聞こえる。どうやら^{アンチスキル}警備員
の奴らが来たらしい。

これで、一件落着か。

不意に両肩を誰かに掴まれた。どうやら掴んでいるのはそれぞれの
肩で違うようだ。

誰かと思って振り返ると、そこには

「「やりすぎですの（じゃん）」」

どうやらこれから^{ジャッジメント}富貴委員と^{アンチスキル}警備員による説教フルコースが待ち構
えているらしい。……………不幸だ。

露出狂注意報（後書き）

どうも爪竜連牙斬です。

もう本当にサブタイトルのネタが思いつかない。

と、いう訳で今回からサブタイトルは普通になります。

何だか最近、自分でも主人公のキャラがよく分からなくなってきたという大惨事。

他の方の主人公みたいに何か貫きたい信念がある訳でもないし。

でも、この物語はそんな主人公が貫きたい信念を見つけないという物語なんです。多分。

それでは次回もお楽しみに。

I a m L E V E L 5

「完了、と。……でも、これを聴くだけでレベルアップって本当にそんなことあるんですかね？」

「善意の情報提供者はそう言ってたぜ」

善意の情報提供者とは前回の不良、もとい『トリックアート偏光能力』の使い手のことである。

「正直、眉唾というか………は！？」

初春が何かに気が付いたようで目をパチッと見開く。

「これを使って白井さん以上の能力者になったら、今までの仕返しにあんなことやこんなこと……」

「思考がだだ漏れですよ」

白井がニヤッと笑い音楽プレイヤーに接続されているイヤホンを初春の耳へと近づける。

しかし、耳に装着される少し前で初春がその手を掴む。

「私に恨みを晴らしたいのでしたら是非！」

「う、嘘です！嘘ですよ！」

二人がじゃれあっていると、突然白井の携帯の着信音が鳴り響いた。恐らく、風紀委員ジャッジメントの仕事だろう。

白井は手を離すと、ほっとしている初春を睨みながら電話に応じる。何度か応答した後、ピッと電話を切る。

「また学生が暴れているらしいですの。初春は木山先生に連絡を！白鞘さんはここで大人しく『レベルアップバー幻想御手』の仕組みについてでも考えといてくださいな」

釘を刺された。

まあ、確かに前はやりすぎたっていうか少し加減を間違えてしまったし、今回は大人しくしておこう。

ふと、初春の方を見ると初春はもう木山先生に電話をしていた。暇だし、お茶でも入れるか……。

そう思って、給湯室に入る。自慢じゃないがここについては結構詳しくなっている。

あ、あと警備員アンチスキルの尋問室という名の説教部屋についても。しかし、最近本当に『レベルアップバー幻想御手』を使った事件が増えてるな。風紀委員もただでさえ大変そうなのにもっと大変そうだ。

「ま、白井に釘を刺されたし、俺は大人しくお茶でも飲んどくか」

最近は何にもなく頑張ったし、ここらで一息吐きますか。

給湯室の中は狭苦しかった。改築しようぜ177支部。

しかし、暇だな。オセロとか暇を潰すものはないだろうか？

お湯が沸くまでの時間ってマジで暇なんだよな。

初春としりとりでもするか。

「初春。しりとりしようぜ」

「な、何ですか？突然」

「いや、暇だから」

「分かりましたそれじゃあ、しりとり」

「りんご」

「ゴキブリ」

オイ、いきなり『り』で攻めてくるな。

「利子」

「心理」

徹底してるな、初春。お前がその気ならこっちだって。

「倫理」

「あ！えくと、えとつと、リスク」

「クスリ」

「リス」

「推理」

「陸」

「栗」

なんか字数稼ぎっぽくなってきたな。この辺で止めるか。

「利己」

「コイン」

「あ、私の勝ちですね！わーい！」

ありがとう初春。お前のおかげでいい字数稼ぎ、じゃなくていい暇つぶしになった。

つと、お湯が沸いたみたいだな。それじゃ、お茶飲むか。

「あ、お茶飲むんですか？私にも下さい」

「いいけど、白井のバックアップはいいのか？」

「大丈夫ですよ。だって白井さんですから」

どんな評価だよ、それ。

ま、俺の評価も大体そんなものだけど。

初春の分のお茶も入れて、給湯室から出る。

そこへガチャッと扉が開いてボロボロの白井が帰ってきた。

「おいおい、大丈夫かよ。その傷」

「大したことはありませんが、またいつあるかも分かりませんし手当てはしておきますわ。初春、救急セットを取って下さいな」

「はい、わかりました」

初春が救急箱を取って戻ってくる。どうやら白井一人では無理だから初春にも手伝って貰うらしい。

そんな事を考えていると白井がジーツとこちらを見てくる。

「どうかしたか？」

「……………今から制服を脱ぐのであちらを向いておいて下さいな」

そういうこと……。

いつまでも睨まれるのは居心地が悪いので白井から目を逸らし、窓の外の景色を見る。

いつも通り、車が走って大量の学生が歩いている。

「本当は御坂さんに巻いて貰いたいんじゃないですか？」

「お姉様に私のこんな姿を見せるわけにはいきませんわ」

「安心して下さい。誰も見たくありませんから」

初春の毒舌の直後、ガシャガシャと暴れる音がする。

恐らく、白井が初春に制裁を加えているのだろう。

そこへガチャツと入り口の扉が開く。入ってきたのは御坂だった。

「おーっす！どう？進んでる？調査の方」

「お、お姉様！？」

ヒュ、という音が聞こえた気がした。その後、ゴン、という痛そうな音がした。

見ると、白井に空間移動させられた初春が御坂とぶつかって二人と

も気絶していた。

「「あ」」

「それで、進んでるの？操作の方」

「それが……」

「テストメント 木山先生の話ですと、短期間に大量の電気的情報を脳に入力する為の『学習装置』という特殊な装置もあるそうです。でも、それは視覚、味覚、聴覚、嗅覚、触覚の五感全てに働きかけるもので…

…」

「『レベルアップバー幻想御手』は音楽ソフト、聴覚作用だけね」

音楽ソフト、つまり聴覚作用だけで五感全てに働きかけるか。

それは…：確か、共感性って奴だっけ？アレなら出来そうだな。

と、考えていると給湯室の方でお湯が沸いた音がした。慌てて初春
が取りに行く。

「なあ、カキ氷のところでした会話覚えてるか？」

「カキ氷？…ええと、食べ比べ？」

額に手を当てながら全く的外れのことを言う白井。

なんでコイツの頭の中は御坂とのそういうことっていっぱいなんだ？

「じゃなくて、共感性のこと？…って、あ！」

「確かにアレなら！」

そこへ給湯室から戻ってきた初春が不思議そうな顔をしながら質問
してくる。

共感性の説明については作者が書くのが面倒らしいので割愛。

仕事しろよ、作者。

「つまり、音で五感を刺激し『テストメント学習装置』と同じ効果を出している
と」

「そういうことだ」

「じゃあ！早速、木山先生に連絡してみますね！」

「あれ？初春は？」

「先ほど、ツリーダイアグラムの樹形図の設計者を見に行くと出て行きましたわよ」

ふーん、と適当に返す。そういえば最近、佐天の姿を見かけないな。

「そういえばそうですわね」

うお、心を読まれた。白井ってテレポーター空間移動者じゃなかったか？と、そこで電話の着信音が鳴った。どうやら白井のらしいな。

「あら、初春。どうしましたの？」

『大変なんです！佐天さんが！』

「そうか……………佐天が…………」

初春の電話で佐天が倒れたことを知った俺達は病院に来ていた。

「ええ、絶対に犯人を見つけるんだと、初春は木山先生のところへ」

「二人とも、ちょっといい？」

思いつめたような顔で御坂が席を立ち、すたすたと歩いていく。
御坂に付いて行くと、十分くらいで屋上に着いた。

「お話って何ですか？」

「佐天さん、いつもお守り持ってたでしょ？」

お守り、というと佐天の鞆にいつも付いているアレのことだろう。フェンス越しに見える屋上からの風景を眺めながら御坂が続ける。

「アレね、お母さんに貰ったんだって。学園都市に来る前に」

「そんな話をお姉様に……」

「うん、多分……色々と話したかったんだと思う」

佐天の話したかったことが何なのかは分からないが、それはきっと能力関連の事なんだろう。

御坂がフェンスに手を掛けながら話を続ける。

「私、『超能力者（レベル5）』とか言ってるけどそういうところ全然駄目だよね」

御坂の言葉は俺の胸にも突き刺さった。

『超能力者（レベル5）』、学園都市の中でも最高峰の力を持つてくせにたった一人の悩みを解決することも出来ない。

そんな力に一体何の意味があるのだろうか。俺がこの能力を持っている理由は何なのだろうか。

「私はさ、目の前にハードルがあったらそれを飛び越えなきゃ気が済まない性質だから、『超能力者（レベル5）』もその結果なだけで、別に凄いとも思わなかった」

御坂は最初、『低能力者（レベル1）』だった。その後、想像もつ

かないような努力をして『超能力者（レベル5）』まで上り詰めたのだろう。

それに比べて俺はどうだろう？ 大した努力もしてないくせに、最初の身体検査で最高（レベル5）を出した。無能力者（レベル0）や低能力者（レベル1）の高レベルの能力者への憧れや妬み等は俺には一切分らない。

「でも、ハードルの前で立ち止まっちゃう人もいるんだよね……。そういう人がいるってことを考えたこともなかった」

誰もが皆強いわけではない。当たり前で小学生だって分かる事。神様はいつだって残酷だ。『人間は皆平等である』なんて言っておいて、ハードルを置く人間を選ぶ。

「レベルなんてどうでもいいんじゃない、なんて無神経な話だよね」
誰だって自分より上の者に憧れる。どれだけ上から優しくされたって、自分の中の劣等感が消えるなんてことは有り得ない。それが人間なのだから。

「だから、捜査に協力させて。佐天さんを助ける為にも」

俺が人より大きな力を持つてるっていうなら、俺はそれを振るい続ける。佐天を救う為に、力の無い人々を守る為に、そして皆の憧れとして君臨し続ける為に。それは力を持つ者の傲慢なのかもしれない。けど、傲慢でも何でも俺が今胸を張って正しいといえる道はこれしかない気がするから。

だから、まずは『幻想御手』^{レベルアップ}を作った奴を見つけ出して、とつとこの事件を終わらそう。

「分かりましたわ。白鞘さんも」

「「ありがとう」」

微笑みを浮かべて言う白井に御坂がよろしくね、と言いながら肩に手を置く。その瞬間、白井の顔が一瞬だけ苦痛に歪むが御坂に心配を掛けない為か、すぐに引きつった笑みを浮かべる。

「こ、こちらこそ」

必死に痛みに耐える白井の顔を見ながら俺はコレも一種の強さか、と思った。

「ちょっといいかい？」

屋上を立ち去り、病院の出口へと歩いている途中、突然後ろから声を掛けられた。

振り向くとそこには、御坂の大好きなキャラクター『ゲコ太』によく似た白衣の男が立っていた。

「ッ！リアルゲコ太!？」

「お姉様、違いますの」

カエル顔の医者是不思議そうな顔をした後、ちょいちょいと手招きをして部屋に引っ込む。

それに続いて、俺達三人も医者の入った部屋に入る。

「これは『幻想御手』^{レベルアップバー}被害者の全脳波パターンだ」

言いながらパソコンの画面を横にスクロールさせるカエル顔の医者。画面には多数の脳波パターンが並んでいる。

「脳波は個人個人で違うから同じ脳波パターンなんて有り得ないんだね？ところが、『幻想御手』^{レベルアップバー}被害者にはある共通の脳波パターンがあることに気が付いたんだよ」

「ということですか？」

「誰か他人の脳波パターンで無理矢理脳が動かされてるとしたら、人体に多大な影響が出るだろうね？」

一つ一つ違っていった脳波パターンが画面上で完全に一致する。これが誰の脳波パターンか分かれば……。

「『レベルアップバー幻想御手』に無理矢理脳を弄られて植物状態になってるってこと？」

「誰が何の為に………」

「僕は医師だ。それを調べるのは君達の仕事だろう？」

「特定の脳波パターンがはっきりしてるなら」

「初春に書庫を検索して貰えば……って、その初春がいないんですの」

そういえばそうだった。初春は今、木山先生の所に行ってるんだっ
た。

「全く、何を騒いでるの？」

「あ、固法先輩」

丁度いいところに現れた固法。一通り事情を説明して固法に書庫を
開いてもらう。

「そういうことなら書庫へのアクセスも認められるでしょうね」

「書庫にデータがなかったら？」

「大丈夫ですわ。能力開発を受けた学生は勿論、病院の受診や職業
の適正テストを受けた大人のデータも載ってるんですから」

「でも、何で『幻想御手』^{レベルアップ}を使ったら同一人物の脳波が組み込まれ
るのかな？」

「しかも能力のレベルが上がるなんて」

確かに、どういう仕組みになっているのだろうか？

パソコンを打ちながら会話に参加する固法。

「パソコンだってあるソフトを使ったからって性能が格段に上がるわけじゃないわよね。ネットワークに繋いだならいざ知らず」

ネットワーク……そうか、そういうことか。

「そうか。『^{レベルアップ}幻想御手』を使って脳のネットワークを構築してるんだな」

「でも、私達の脳はパソコンで言えばOSが違ってるみたいなものだから使っても意味ないんじゃない？」

「パソコンのネットワークだってプロコトルによってそれぞれが繋がってる。つまり、特定の人物の脳波パターンがプロコトルの役割をしてるんだろ」

そこまで言って御坂がハツとした顔をする。

「そうか、ネットワークを繋ぐことで能力の処理速度を高めてるのね」

「恐らく、昏睡患者は脳の全てをネットワークに使われてるのね……出たわよ！」

ピツと言う音と共に画面に脳波パターン一致率99%と表示される。

その人物は……

「木山春生……?」

「「初春さんが!」」

ガタツと固法が席から立つ。白井は初春と連絡を取る為に携帯を取り出す。

「繋がりませんわ!」

「警備員アンチスキルに連絡! 木山春生の身柄確保! ただし、人質がいる可能性あり!」

「はい!」

白井は再び携帯で警備員に連絡を取る。
その間に俺は扉から外に出ようとする。

「何処に行くんですの!?!」

「決まってるだろ。木山を追うに行く」

「そうね、一般人を巻き込むのは気が進まないけど『超能力者（レベル5）』のあなた達がいてくれたら」

「じゃ、行ってくる」

固法の言葉を最後まで聞かずに177支部を出る。
と、そこで御坂に引きとめられた。

「私もいくわ！」

「お姉様！初春も風紀委員の端くれ、いざとなれば自分で何とか…
…多分…運がよければ」

どんどん白井の声が小さくなっていく。無理も無い。初春は小学生の喧嘩も収められそうにないしな。

「それに！一科学者の木山に警備員を退ける術はないかと！」

「何千人もの昏睡者の命が握られてるのよ！それに、何か嫌な予感がするの」

「なら、尚の事ここは風紀委員である私が！」

白井が食って掛かるが御坂が白井の肩を軽くつつく。

すると、白井はビリビリと身体を震わせる。ツインテールが触手のように揺れていた。

「そんな身体で動こうっての？」

「お姉様…気づいて？」

「当たり前でしょ。アンタは私の後輩なんだからたまにはお姉様に甘えなさい」

黒子の額を指で押しながら御坂は笑う。

さて、話がまとまったならさっさと行こう。

「それじゃ行くわよ！」

I a m L E V E L 5 (後書き)

どうも爪竜連牙斬です。

サブタイトルが英語なのは特に意味がありません。

強いて言うなら意味は無い！

ついに次回は木山先生と対決！

長かったね、うん。更新速度が遅いだけですが。

そして、意外なアイツが登場！

それでは次回もお楽しみに！

VS 木山

「お釣りはいらないわ！それよりも早くここから逃げて！」

「ちょ、ちよっと！お客さん！」

急いでタクシーから降りて現在木山と警備員アンチスキルが交戦中であろう道路の上へ向かう。上からは銃声が鳴り響いている。恐らく警備員のものだ。これを木山に退けられるとは思わないが、鳴り止まないということは木山はこれを退けているのだろう。

「黒子！状況は！？」

「信じられませんわ……………木山春生が警備員と交戦中。それも能力を使って」

能力を使っってことは木山は能力開発を受けていた？確かにそれなら上の銃声が鳴り止まないのも頷けるが。

「彼女、能力者だったの？」

「書庫バンクにはそんな記録はありませんが…………。どう見ても能力を使っていますわ。それも複数」

複数ってそんな馬鹿な。能力は一人に一個っていうのは基本じゃなかったのか？『多重能力者デュアルスキル』だって不可能とされているのに。

階段を駆け上がり、上に着くと既に銃声は鳴り止んでいた。但し、立っていたのは警備員ではなく木山だった。

「警備員が全滅？」

「嘘だろ……」

道路の上には倒れている警備員達。そして、破壊された警備員の特別車両等が転がっている。そして、木山の車の中にぐったりとしている初春の姿があった。

「初春さん！」

「心配するな、戦闘の余波を受けて気絶しているだけだ。命に別状はない」

命に別状はないって、命を奪わなかったらそれでいいと思ってるのかよ。

立ち込める粉塵の中から現れた木山は余裕そうな表情でこちらを見ている。

「いくら『超能力者^{レベル5}』の君達でも私のような相手と戦ったことはあるまい。君達に一万の脳を統べる私を止められるかな？」

「当然だ。その為に俺達はここに来たんだからな」

臨戦態勢に入る俺達。先ず最初に動いたのは御坂だった。しかし、走り出した御坂に対してどういう風に能力を使ったのか、木山は地面を切り取り御坂の動きを止める。そして、右手を前に差し出し掌から風を発射させる。それに対して俺は御坂の前に出て風の威力を無効化する。

「驚いたわ……。本当に複数の能力が使えるのね。多重能力者だな

んて楽しませてくれるじゃない！」

「私の能力は理論上不可能とされているアレとは方式が違う、いわば『多才能力者』だ」
マルチスキル

言い終わると同時に木山の手からもう一度風が発射された。今度は相手を吹き飛ばすような風ではなく、相手を切り裂くための風。それを左右に跳び避けた俺達は直ぐに攻撃に移る。

「呼び方なんてどうでもいいわよ！こっちがやることに変わりはないんだから！」

言いながら電撃を飛ばす御坂。しかし、それは木山が作ったシールドにより防がれてしまう。

「どうした？複数の能力を同時に使うことは出来ないと踏んでいたのか？」

木山が不敵に笑う。そして、何かしらの能力を使い地面に亀裂を入れる。

このままじゃ落ちる。御坂を抱えて後ろに下がるべきか？

しかし、この案は直ぐに却下された。亀裂の入った地面に警備員が横たわっていた。どうやら気絶しているらしい。

「チッ！」

俺がそれに気づいたのと同時に地面の崩落が始まる。

悪いが御坂を助けてる余裕は無さそうだ。

気絶している警備員を抱え、負傷している警備員達の下へ運ぶ。

そこで、俺は黄泉川がいることに気が付いた。

「お前が居てこの様かよ、ったく」

「……そいつは認めるけどお前は離れとくじゃんよ。こいつは私達の仕事だ」

「……………貸し一つな」

黄泉川の制止を聞かず、崩れた地面の下へと着地する。そこでは、既に御坂と木山が戦闘を開始していた。

「ッ！遅いのよアンタ！」

「悪かったな、遅くて」

ていうか結構苦戦してるのな、御坂。確かに木山は厄介な相手だがそこまで苦戦することもないだろう。

そんな様子を眺めていた木山だったが痺れを切らしたのか、空き缶を浮遊させる。

「それは！」

間違いない。グラビトン事件の時の介旅の能力だ。空き缶の形がみるみる内に歪んでいく。

しかし、それは爆発しなかった。理由は簡単で御坂が電撃で吹っ飛ばしたからだ。

「大した力だな。だが、これならどうかな？」

ゴミ箱の中にあった大量の空き缶が宙に浮く。しかし、それも御坂

の電撃によって全て吹っ飛ばされる。

それを見ても余裕の表情を崩さない木山。その手には一個の空き缶が握られている。

が、次の瞬間その手の中にあつた空き缶が消えた。

それが空間移動によるものだと思ついた時には空き缶は既に後ろだつた。

どうにかしてそれを止めようとしたが、御坂がそれを制止した。

そして、ドゴツという音が辺りに響き空き缶が爆発した。

（変だな……『超電磁砲^{レールガン}』はともかく、『絶対防御』の方はこんな簡単にやられる筈は……）

とりあえず御坂を仕留める為に飛ばした空き缶だったが、意外にも委温まで一緒に倒れてしまった。木山にとっては好都合であるがどうも違和感が拭えない。

「恨んでくれても構わんよ」

倒れ伏す御坂と委温を見下しながら背中を向けて立ち去る木山。しかし、木山の腰が何者かの腕によってがっしりと捕まる。

「つつかまえた」

「ッ！馬鹿な！」

掴んでいたのは驚くことに先ほど爆発を喰らって倒れた筈の御坂だった。

磁力で即席の盾を作って爆発を防いでいたのだ。

「零距离からの電撃……。あのバカには効かなかったけど、いくらなんでもあんな出鱈目な能力まで持ってないでしょうね」

「くっ！」

鉄骨の槍が御坂に向かって飛んでいく。が、それらは全て弾かれた。地面に埋もれて居た筈の委温によって。

「喰らえ！」

御坂が叫ぶと同時に、大量の電撃が木山を襲い、絶叫が辺りに響き渡る。

数秒後、電撃が止んで木山はガクッと御坂の腕の中でうな垂れてい

た。

「ったく」

木山が気絶しているのを確認した御坂が安堵したように息を吐く。
終わった、とそう思っていた。

『先生！』

何処からか子供の声が聞こえた。無邪気な子供の声。

御坂の様子がおかしい……。何が起きてる？

「おい、御坂！大丈夫か！？」

ガシッと御坂の肩を掴むと、御坂は木山を離し、木山はドサッと地面に倒れこんだ。

「今のは……………」

「今の？お前、何言ってる？」

「見られたのか……………」

意識が回復したらしい木山が頭を抑えながら呟く。

だが、見られたって何を？

「今、木山の記憶が……。何で、何であんなことを！」

「フフ……。アレは表向き、AIM拡散力場を制御するための実験とされていた……。が、実際は暴走能力の法則解析用誘爆実験だ。AIM拡散力場を刺激して暴走の実験を知るのが目的だったというわけさ」

「じゃあ！」

「暴走は意図的に仕組まれていたというわけさ。もっとも、気づいたのは後になってからだがね」

さつきから二人は何の話をしている？
能力の暴走実験とコレに何の関係が……。

「人体、実験……………」

「あの子達は一度も目覚めることなく、今尚眠り続けている。私達はあの子達を使い捨てのモルモットにしたんだ！」

あの子達？それは誰のことを……。そういえば前に木山は教鞭を振るってたとか言ってたなかったか？
だとしたら……。

「でも！そんなことがあったならっ！警備員に通報したら！」

「23回！あの子達の回復手段を探るため、事故の原因を究明するためのシミュレーションをするために樹形図の設計者の使用を申請した回数だ。樹形図の設計者の演算能力を持てれば、あの子達を助けられる筈だった。もう一度太陽のしたを走らせてやることだ。……だが却下された！23回全てだ！」

「えっ」

「統括理事会がグルなんだ！警備員が動く訳がない！」

統括理事会って学園都市上層部の事か？

この事件を起こしたのはその子供達を助けるためだったていうのか？

「だからって！こんなやり方！」

「君に何が分かる！あの子達を救う為なら私は何だってする！この

の大きさの。

御坂が後ろに向かって走り出すと、それに釣られて俺も走り出す。

「アンタ！ちゃんと戦いなさいよ！」

「うるせえ！自分が出来ないことを他人に言うな！」

「二人とも！」

あれ？この声は……。

「「初春（さん）！？」」

そこには気絶から回復したのか初春が立っていた。

というか、降りてくるなよ！言ったら悪いけど戦闘力無いんだから！

「駄目じゃない！こんな所まで来ちゃ！」

「す、すみません！でも」

「アイツの相手は俺達がするから、お前は安全な場所にいろ！」

降り注ぐ氷弾を捌きながら、初春にそう指示する。

だが、返事を返したのは初春じゃなかった。

「悪いが、お前にはソイツじゃなくて俺の相手をしてもらうぜ」

この声……………聞き覚えがある。確か、一方通行と戦った時に…………

まさか！

轟！という音がした。咄嗟に振り向くがもう遅い。放たれた純白の翼は俺の体を容赦なく吹っ飛ばす。

まただ、またあの時のように能力が通じてない。

コイツは間違いなく……

「よう、久しぶりだな。『絶対防御』」

「『ダークマター未元物質』、垣根 帝督か！」

学園都市前二位がそこに立っていた。

V S 木山（後書き）

どうも爪竜連牙斬です。

ついにきたぜ、オリ展開！

そして、あろうことか絆理ちゃんの回想シーン（正確には木山先生の回想シーン）飛ばしたぜ！

そして、そして、帝督ウウウ！

さて、テンションが大変鬱陶しいことになってますが、実はていとクン。自分の中では結構順位上だったり。

次回は現二位VS前二位。

お楽しみに！

V S 垣根

「何で俺がここに、って顔してるな」

垣根の背中からすうっと翼が消える。

怪訝な顔の俺を垣根はニヤツと顔を歪ませながら言う。

「目的は一つ。お前をぶっ殺しに来た」

一瞬、何を言われたのか理解が出来なかった。余りにもあっさりと、嘘など全くない様子で言われて。

数秒遅れて、ようやく口から言葉が出る。

「……理由は？」

「ああ、簡単なことだ。お前は学園都市統括理事長アレイスターのプランになった可能性が高い。恐らくはスぺアだろうがコッチとしては早めに潰しときたいんだよ」

学園都市統括理事長のプラン？一体、何の事だ？

「ま、お前は今から俺がぶっ殺すって事だけ分かるときゃオツケーだ」

言い終わると同時に、垣根の背中から純白の翼が生える。

マズイ。あの怪物だけでも厄介なのに、更に垣根の相手など絶対に無理だ。

そんな俺の焦りを感じ取ってくれたのか、御坂が言う。

「白鞘！アンタはソイツの相手しなさい！向こうの相手は私がやっ
といてあげる！」

御坂の提案に俺は戸惑った。あんな怪物を御坂に任せていいのか。
だが、判断する時間は与えて貰えなかった。

垣根の翼が一直線に俺に向かってくる。高速で襲い掛かるそれを、
間一髪の所で避ける。

「ッ！御坂、頼んだぞ！」

「任せなさい！」

御坂の返事を聞いてから、とりあえず垣根と距離を取るために道路
を離れる。

向こうも御坂に興味はないらしく、俺の方へと向かってくる。

「さてと、それじゃ殺される覚悟は出来たってことでいいんだな？」

「上等だ。返り討ちにしてやるよ」

口では強がって見せたものの、内心はやはり不安である。

自分の絶対と言ってもほぼ間違いない防御を全て貫かれている、と
いうのは結構怖いことである。

垣根が翼を使って、空中に浮かぶ。

「行くぜ」

路地裏の喧嘩ではない、正真正銘の殺し合いが幕を開けた。

垣根が翼で空気を叩き、委温は脚で地面を蹴り、お互いが空中でぶつかる。

しかし、片方が思い切り吹き飛ばされる。

吹き飛ばされたのは委温。10メートル程吹っ飛んでようやくその体が止まる。

激痛が体を襲ったがそれに構っている暇はない。

何故なら、垣根から翼による第二撃が来たからだ。

今度は喰らわない。翼を掻い潜りながら垣根へと近づき、回し蹴りを放とうとする。

だが、垣根は翼を使い盾を作る。

それごと吹き飛ばそうとする委温だったが、脚が当たった瞬間に、垣根は翼を一枚一枚の羽へと分解して衝撃を緩和する。

「（衝撃の緩和か……一体、奴の能力は何だ？）」

「前に説明してなかったか？ 俺の能力は『ダークマター未元物質』。この世界に存在しない物質を作り出す能力だ」

垣根は猛烈な勢いで振るっていた翼を一旦止めて、喋りだす。

その顔には余裕があった。自分の手の内を晒しても負けることはないという。

「俺の作った物質は既存の物理法則じゃなくて独自の物理法則に従って動く。そして、コイツと相互作用した物質や現象も独自の法則に従う」

「だから何だってんだよ」

「慌てんなよ。まあ、俺の能力についてはこんなもんでいいか。テメエの『絶対防御』は万物の威力を操作する能力だ。つっても、毒ガスやウイルスなんかも防げるところを見ると、単純に威力を操ってるってわけじゃなさそうだが。俺が言いたいことは、テメエは無意識の内に自分にとって『必要な威力』と自分にとって『不要な威力』を分けてるってことだ」

楽しそうに説明する垣根に対して、委温に余裕はなかった。

勝ち誇るように垣根は説明を続ける。

「つまり、テメエが『無意識の内に受け入れてる威力』に俺の『未

元物質』で作った『ありえない威力』を入り込ませてるんだよ」

通常の物理法則に従っているが故に出てくる、防御の穴。

垣根はそれを突いてきているのだ。

垣根が翼を振るい、烈風を巻き起こす。

それ自体は防御が出来た。しかし、

「今の烈風にはざっと二万種類くらいの威力を注入してある。あとは、コイツを解析すればテメエはチェックメイトだ」

「（なら解析が終わる前に！）」

委温が垣根に向かって突進して、凶器のような拳を振るい、蹴りを放つ。

だが、垣根は余裕の笑みを崩さない。自分の勝利は揺るがない、とその顔は語っていた。

そして、垣根は翼で全てを防いだ。委温の攻撃全てを。

「逆算終了」

残酷な宣告が響いた。垣根の翼が兵器と化して委温を襲う。ザシュ！という音がして、委温の肩に激痛が走る。

見ると、左肩を未元物質が貫いていて、鮮血が流れていた。

「ッ！」

委温が地面を思いつき蹴り、身を隠す為に森林へと跳ぶ。それを追うように垣根も飛ぶ。獲物を追うのを楽しむ狩人のような顔で。

「くそつたれ……………」

異質だ。あの能力は学園都市230万人の中でも究極の異質だ。
ていうか、アレなら一方通行にも勝てるんじゃないか？

「どうするかな……………」

全てを投げて逃げる、という選択は無駄だろう。
向こうは俺がここに来ていることを知っていた。ということは、俺
の居場所が分かる能力者か何かがいるのだろう。
なら、ここで迎え撃つ。一番難しくて、一番簡単な選択だ。

「けど、本当にどうすりゃいいんだよ」

俺の防御は既に解析されている。

この世界においてはほぼ絶対の防御も、垣根の言う異世界には全く通じていない。

「異世界か……………待てよ」

垣根は異世界の法則を使って俺の『この世界』の防御を破った。
なら、俺の防御を『異世界』の防御にしたらどうだろうか？

垣根が俺の防御を解析したように、俺が垣根の能力を解析したら…
…。

出来るかどうかは分からないが、やってみる価値は十分ある。

「随分と短い鬼ごっこだったな」

ドパァ！という音がして、木々がなぎ倒され、垣根が姿を現す。
相変わらずムカつく程に余裕の表情だ。

「ああ、ここからは攻守交替だ」

それじゃ、反撃開始といくか。

「オイオイ！攻守交替してくれるんじゃないのかよ！」

笑いながら垣根が翼を振るい、烈風を生み出す。

委温も烈風を生み出し、それを相殺しながら垣根から距離を取る。

「準備がいるんだよ。お前を叩きのめすためのな」

「なら、準備が終わる前に殺されないよう頑張れよ」

言いながら翼で空気を叩き、一気に委温へと接近する。
しかし、委温は立ち向かわずにまた回避する。

それを見た垣根はニヤツと笑い、翼で委温の着地点を抉った。
半径二十メートル程の巨大な大穴が出来る。

「ッ！」

着地する場所を失った委温に、垣根の翼が襲い掛かる。
ゴッ！という音と共に委温の体が木々をなぎ倒しながら進み、十本
ほど倒したところでようやく止まる。

「……………期待外れだな」

ハア、とため息を吐きながら垣根がっかりしたように言う。
しかし、垣根はそこで委温が笑っていることに気が付く。
全身をボロボロにして、決して少くない出血をしているにも関わ
らず、確かに委温は笑っていた。

「何がおかしい？」

「……………別に。あっちはそろそろ終わってるなと思ったただけだ」

あっち、というと第三位と怪物の戦闘のことだろう。

垣根は相手にせずに、翼の照準を設定する。狙いは心臓。
あとは翼を振るえばそれで終わり。目的は達成される。

「じゃあな」

ドッという音がして、垣根の翼が高速で委温に向かっていき、命中する。

砂埃が舞う。生死は確認しない。決着は着いた。

そう思って、翼を仕舞おうとする。

そして、垣根の体が大きく吹っ飛ばされた。

「ッ！何が！？」

咄嗟に翼で防いだものの、完全に不意を突かれたため、ダメージは殺しきれなかったらしい。

慌てて衝撃がやってきた方向を見て、愕然とする。

「勝手に自分の勝ちにすんな、クソ野郎」

白鞘委温が立っていた。

訳が分からなかった。何故、委温が生きているのか。どうやってあの攻撃を防いだのか。

「確かにこの世界にはお前が言う物質は存在しない」

余裕そうな表情を浮かべて委温が喋りだす。さきほどの垣根と同じように。

「だから俺の防御はお前には通じないし、俺の攻撃もお前には通じない」

「なら、どうやって！」

そんな委温の態度に苛立ちを覚えながら、更なる説明を求める垣根。

それに対して委温は余裕の態度を崩さずに、垣根の要求に答える。

「簡単だ。お前が破ったのは『この世界』に対応した俺の防御なんだから、お前の作り出した『異世界』に対応した防御に変えればいい」

「ッ！俺の『未元物質』を解析したって事か！」

「そういう事だ」

二人の形勢は完全に逆転した。

「ッ！調子に乗ってんじゃねえぞオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

激昂した垣根が烈風、光線、打撃と多彩な攻撃を放つが全て右手一つで弾かれる。

そして、一瞬で垣根との距離を詰めてパンチを繰り出す。

「ッ！」

距離を詰められた一瞬の間に垣根は翼を防御に回したが、委温の拳は簡単に翼の防御を崩し、垣根は勢い良く吹っ飛んでいく。それだけでは終わらず、もう一度垣根の元へ跳んで、垣根を掴み思いつきり投げる。投げられた垣根は何度か地面を転がった後、翼を使い空に飛び上がり態勢を整える。

「分かったかよ？これがお前と俺にある壁だ」

「ふざけやがって！ならもう一度解析して！」

諦めずに解析を始める垣根に、委温は呆れたようなため息を吐く。

「何回やっても同じだと思うけどな」

「舐めてんじゃねえエエエエエエエ！……！！！！！！」

再び激昂した垣根の翼が一回り程大きくなる。どうやら一撃に賭けるつもりらしい。

それを察したのか、委温も腰を落として迎撃の態勢を取る。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

垣根の咆哮が当たりに響き渡り、『現二位』と『前二位』が交差する。

「クソツたれが……………」

戦闘の余波を受けて木々が多数倒れている森林の中で、垣根帝督は仰向けで寝転がっていた。

見ると、体の至る所から出血していたが、出血量自体は大したことにはなかった。

情けをかけられた、というのは気に食わないが、今は死ななかったことに感謝すべきだろう。

「あの野郎、舐めやがって……」

彼の頭に先ほどまで命を賭けた戦いを繰り広げていた少年の顔が思い浮かぶ。

男性のくせに女性のように整っていて美しい顔。モデルのようなスリムな体系。

どう考えたって殺し合いには向いていなさそうだった。実際、彼は命を賭けた殺し合いをするのは初めてだっただろう。そんなのに負けたのかと思うと、自分に対する苛立ちと情けなさがこみ上げて来た。

「次会ったときは必ずぶっ殺してやる」

自分の能力の欠点は分かった。これを克服しない限りは、彼にも、第一位にも、統括理事長にも勝つことは出来ないだろう。もう一度、彼の顔を思い浮かべてみる。

「案外気が合いそうだな」

そう言って、彼は笑った。それは純粋な笑顔にも邪悪な笑顔にも見えた。

「ッ！無事だったのね！って、アンタ！肩から大量出血してるじゃない！？」

「ん？ああ、まあ大したことないだろ……アレ？何か川の向こうにパフエの楽園が」

「渡るな！絶対渡らないでよ！？」

冗談なんだけどな。

御坂の方も無事にあの怪物を倒す事が出来たようだ。

木山春生も警備員に連行されていったし、『幻想御手』^{レベルアップ} 事件も一段

落ってところか。

「そういえば第三位は？」

「向こうの方でぶっ倒れてる。動けないようにしたつもりだが、多分動けるだろうな。まあ、戦闘するような体力は残ってないだろ」

しかし、本当に強かったな。いや、強いというより怖かった。

今回は勝てたからいいが、あそこであの作戦を思いつかなかったら、と思うとゾツとする。

「お前の方こそ大丈夫なのかよ？ あんな得体の知れない化物と戦ったのに」

「まあね。ちゃんと喝入れてやったわ」

そう言って微笑む御坂。

ゴメン、何の事かさっぱり分からん。

と、そこへ後ろから誰かに頭を叩かれた。

「白鞘！ ったく、無茶しすぎじゃんよ！」

「悪かったな、ってこら、ヘッドロックすんな。何か色んな意味で死にそう」

恐らく黄泉川は、冗談でやっているつもりなんだろうが冗談では済まされないレベルになっているのと、黄泉川の爆乳が俺の顔に当たっているのを見て御坂が『やっぱり男は乳がー！』とか言いながら最後の力を振り絞ってめっちゃバチバチさせてるのが怖い。

「でも、無事で良かったじゃんよ……」

ヘッドロックから一転、今度は急に抱きしめられた俺だがやっぱり窒息しそうだ。というか御坂の前でそんなことをするのは止めてやって。アイツの乳に対する劣等感の半端じゃないぞ。

けどまあ、こんなに心配してくれているのは正直言って嬉しい。

「まあ、その、心配かけてすいませんでした」

「ま、まあ分かったならいいじゃんよ」

黄泉川も素直に謝られるとは予想していなかったのか、戸惑いながら俺を解放する。

そして、両者の間に何ともいえない微妙な沈黙が流れる。

ていうか、あれ？何か視界がぼやけてきた……。。

「ちょ、ちょっと！大丈夫！？」

御坂の慌てた言葉を耳にしながら俺はゆっくりと意識を手放した。

V S 垣根（後書き）

どうも爪竜連牙斬です。

こんなにも間を空けてしまい申し訳ございませんでした。

あともう一つ、作中で主人公が垣根の未元物質について理解していませんでしたが、よく見たら前に説明されて納得してました。

というわけで、コレはスルーしてもらえると嬉しいです。

ではでは、また次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7494o/>

とある少年の絶対防御

2011年8月1日02時28分発行